ウォーキング俳句　続

ー四季の折々にー

林部　敬鬼　著
加代女　著

目

次

春……17
正月家族旅行……18
豆まき……19
桃の節句……20
湯豆腐……21
立春……22
啓蟄……23
春一番……24
蕗の薹……25
つくし……26
すみれ（菫）……27
梅の香……28
光の春……29
桜餅……30
菜の花……31
卒業式……32

紫木蓮……33
水温む……34
山笑う……35
沈丁花……36
雪柳……37
桜咲く……38
桜の木……39
花冷え……40
花吹雪……41
花筏……42
八重桜……43
チューリップ……44
春霞……45
椿……46
木の芽とき……47
春眠……48

春雨……49
草萌ゆる……50
メタセコイア……51
浅蜊採り……52
入学と新学期……53
朧月夜……54
花桃……55
杉の花……56
夏……58
葉桜……59
新緑……60
風薫る……61
鯉のぼり……62
潮干狩り……63
藤の花……64
万緑……65

泰山木の花……66
栗の花……67
夏草……68
桜鯛……69
わらび……70
豌豆……71
牡丹……72
こどもの日……73
さつき（皐月）……74
あやめ……75
母の日……76
梅雨入り……77
父の日……79
紫陽花……80
くちなし（梔子）……81
6月も終わり……82

金魚……83
夏来る……84
土用丑……85
夕立……86
冷ややっこ……87
七夕……88
さるすべり……89
梅雨明け……90
暑さ……91
蝉しぐれ……92
夏蝶……93
アブラゼミ……94
ひまわり……95
ハイビスカス……96
トマト……97
胡瓜……98

氷水……99
花火……100
夏祭り……101
日傘……102
冷麦……103
カブトムシ……104
プール……105
お盆の墓参り……106
空蝉……108
帚木……109
夏終わる……110
秋……111
赤とんぼ……112
こおろぎ……113
秋刀魚……114
お盆……116

十五夜……117
女郎花（おみなえし）……119
すすき……120
秋の運動会……121
金木犀……122
台風……123
柿……124
秋深し……125
秋祭り……126
落葉……127
紅葉……128
松茸……129
新酒……130
秋の雲……131
秋の風……132
秋の暮れ……133

中学同窓会……134
鶴ヶ城……135
野村もみじ……136
冬……138
時雨……139
お菜洗い……140
山眠る……141
木枯らし……142
枯葉舞う……143
寄せ鍋……144
夜寒……145
蜜柑……146
山茶花……147
朝の霜……148
葉ボタン……149
冬の空……150

初氷……151
風花……152
クリスマス……153
南天の実……154
年の暮れ……155
元旦……156
雪景色……157
鏡餅……158
どんと焼き……159
水仙……160
月、木星、金星の一直線……161
日向ぼっこ……162
おでん……163
日脚伸ぶ……164

ウォーキング俳句　続

―四季の折々に―

はじめに

われわれ夫婦は７６歳と７４歳になり、結婚後５０年の金婚式を５月に迎え、来し方と行く末をあれこれと考えることが多くなった。幸いにも、２つの手術を克服し、今は万全とは言えないものの毎日を夫婦で送る上で差し障りはない。

先に病後の回復のひとつとして「ウォーキング俳句」を上梓した。これは、その続きとなるもので、先のものは二十四節気を中心として俳句をまとめたが、今回は四季折々の風物に身の回りの雑事も入れてまとめたものである。

夕方のウォーキングは、はじめは、犬と私でウォーキングしていたが、後に妻も加わるようになった。こんな散歩が退職後６年も続いただろうか。クウタローも寄る年波に勝てず、歩くのが遅くなり、よたよたし、ついには後ろ脚が萎えたように細くなって立てなくなった。約半年後の２０１５年２月初旬の早朝に娘に看取られて息を引き取った。

この後、われわれ夫婦だけでウォーキングを続けることになったので、いつも二人でおしゃべりというわけにはゆかず、ウォーキング吟行と称して俳句を作り、書き留めながら歩くようになった。家の周りから公園など

散歩していると季節の草花や樹木の花、あるいは芽吹きや紅葉を目にするので、この印象を俳句に詠みたくなった。歩きながら今日の季語を決めてその日の演題にして作句する。そして詠み込んだ俳句をメモし、あとでまとめてパソコンに取り込み整理することにした。演題は植物、動物、行事などであるが、植物についての作句が多くなる。それだけ、身の回りの自然は植物が豊かなことだと思う。

メモをもって何やら書きながら歩いていると、行き会った人たちが怪訝そうに見るので、俳句をつくっていると、「テレビでも人気ですからね」と感心されたりした。

ここにまとめた俳句はこんな契機でできたものである。日本の四季に身近に咲く花や樹木、季節の風物、行事、生き物、そして孫たちとの旅行などである。

また、先人たちがどのように四季を俳句に詠んだかを、周知の俳人たち、たとえば松尾芭蕉、与謝蕪村、正岡子規、夏目漱石、高浜虚子、飯田蛇笏、日野草城、種田山頭火、久保田万太郎らの俳句を借りて紹介した。これらの俳人たちは、四季折々の景色や風情を巧みに写実し表現している。

これは夫婦ともに喜寿間近の俳句集で、まことに拙い俳句ではあるが、季節の折々に感じたものを俳句という形式でまとめている。われわれには何ものにも代えがたい俳句集になったと自負したい。

２０２０年９月１日

春

正月家族旅行

正月元旦に日本を出発しハワイホノルルに観光旅行をした。妻、娘、息子、その嫁、そして2人の孫とであった。ハワイは2度目であったが十一年も前のことで、ホノルルも高層ビルや巨大ショッピングセンターが建って大きく変貌していた。

何でも年末年始にハワイに行く観光客は六万人余にも昇るのだそうだ。そういえば、飛行機は往復とも満席だったし、ワイキキの通りや店舗、レストランには日本人が多かった。

ワイキキの公園には根が枝から垂れ下がる巨大なカジュマル、街路にはヤシの木が生えていて南国にいる感を強くした。カジュマルは枝から根のようなものが樹木の全周にわたり地面に垂れ下がっている特異な樹木だ。これは気根と呼ばれ、幹のように大きく成長する。大きな木陰をつくるのでハワイの炎天には格好の休み場所となる。ワイキキビーチに沿った散策路には椰子も多い。高木で二十メートル以上にもなるが、大きく枝を広げた亜熱帯の南国の樹木といえる。

「ワイキキで椰子の木陰の年始め」　敬鬼

豆まき

幼き頃、雪降る善光寺で豆まきがあり、近くに住んでいたので見に行った。年男になる有名な俳優とか関取が欄干から豆まきしていたことを鮮明に想い出す。

信濃毎日新聞に「節分の３日、長野市の善光寺恒例節分会には、人気グループＥＸＩＬＥのメンバーら男女３人でつくるダンスユニットが参加、福は内、鬼は外の威勢のよい掛け声で本堂回廊から豆や菓子をまき、待ち構えたファンの若い女性ら大勢の参拝者からは、大きな歓声が上がった」とあった。豆まきは、邪気除けのために行う。

「節分をみかけて雪のふりにけり」

久保田万太郎の句。この頃は一番寒い頃で良く雪が降る。

「わがこゑのこれる耳や福は内」

飯田蛇笏の句。山梨の山村で暮らし大正時代における「ホトトギス」隆盛期の代表作家。耳に残れるのは「福は内」だという。

「豆まきや耳目集める善光寺」　敬鬼

「節分や父ちゃん鬼に豆ぶつけ」　加代女

桃の節句

４歳になる孫娘がいるが、転勤族なので雛壇飾りを用意し祝ってやれないのが残念だ。菱餅や雛あられを食して女子の健やかな成長を祝いたかったが、いまではケーキにかわったのだろう。

「健やかにまします子娘等の雛祭」

杉田久女の句。鹿児島県出身、虚子に師事。近代俳句における最初の女性俳人。ここでは、娘らが健やかに育っているのを素直に喜ぶ。

「子ら去りてむなしく雛の居り給ふ」

日野草城の俳句。エロスを主題とした句や無季俳句を作り、昭和初期の新興俳句運動を主導した。句では、娘はいずれ育って家を出て行く。あとに残るは雛ばかりで寂しいと詠む。

「雛祭り雛と残さる老い二人」　敬鬼

「老夫婦孫の歌聞く雛祭り」　加代女

湯豆腐

寒い冬の夕餉には、湯豆腐が一番だ。おいしい上に身体が温まるし、これを肴に日本酒とくれば言うことなしだ。

江戸時代天明年間（１７８２年頃）の料理本である「豆腐百珍」には１００種類の豆腐料理の調理方法を解説しているが、そこには湯やっこの名の下に湯豆腐が記載されていた。もっとも、ここではただの湯ではなく、葛湯が使われている。絶品だそうだ。

「湯豆腐やいのちのはてのうすあかり」

命の果てと言うほどに妙なる味という。久保田万太郎の句。生粋の江戸っ子として江戸言葉で軽妙な小説と俳句をつくった。

「ひとりで食べる湯豆腐うごく」

山頭火の句。ひとり箸で摘まむと豆腐がごろりと動く。なんて楽しいのだ。日本の自由律俳句の俳人。得度し放浪しながら作句した。山口県防府市の生まれ。

「湯豆腐や豆腐とねぎのハーモニー」　敬鬼

「湯豆腐や湯気もご馳走温もれる」　加代女

立春

二十四節気の最初が立春である。冬至と春分の中間で冬が極まり春の気配が立ち始める日として示され、たいてい2月3日頃である。旧暦（太陰太陽暦）の元日は立春前後になる。

「花さかぬ木に春来る若葉かな」

子規の句。冬には枯れたように見える枝にも若葉が芽生えている。

「ぽんかんのあまあまと春立ちにけり」

「朝の茶のかんばしく春立ちにけり」

草城は柑橘類の一種のポンカンに、そして茶に立春を見て感興する。

「春立つや草木生気蘇えり」

「春立つや明け行く空の騒々し」

「無精し時過ぎ去りて春立ちぬ」　　敬鬼

「ひかり増しどこか嬉しい春立ちぬ」

「立春や手足伸ばして猫あくび」　　加代女

啓蟄

二十四節句では雨水と春分の間に啓蟄をおく。冬ごもりの虫が這い出る陽気になった3月5日頃を指す。害虫が木に巣くうのを防ぐための菰巻をはずすのもこの頃。もっとも、害虫駆除の効果は無く、菰巻きと菰外し冬と春の風物詩となっている。

「啓蟄のいとし児ひとりよちよちと」

「啓蟄の夜気を感ずる小提灯」

蛇笏の俳句。可愛い子が外を歩けるようなに成長し、同時に陽気な気候になったことを、2句ではそれでも夜分になると冷たい夜気で手提灯が揺れる。

「啓蟄や葬の騒ぎのひとしきり」

草城の俳句で、この良い気候に葬儀があり、その騒ぎに紛れてしまったが、いまは静寂に戻った。

「啓蟄や畑の土も黒さ増し」　敬鬼

「啓蟄や窓広々に空をいれ」

「啓蟄や炬燵そろそろ片づけむ」　加代女

春一番

立春から春分の間に初めて吹く南寄りの強い風をいい、春一番が吹いた日は気温が上昇、でも翌日などは「寒の戻り」となることが多い。日本海を進む低気圧に向かって南側の高気圧から強い風吹き込むことによって起きる。

１９７５年に発表された３人娘のキャンデーズの「春一番」は、

「雪が溶けて川となって流れていきます　つくしの子がはずかしげに顔を出します　もうすぐ春ですね　ちょっと気取ってみませんか・・・・」。これは穂口雄右の作詞と作曲。他の曲としては、「微笑みがえし」、「年下の男の子」などがあり、軽快なテンポで春が到来した嬉しさと楽しさをキャンデーズが歌っていたのはなつかしい思い出だ。

「空澄みて春一番のうなりかな」
「川の瀬や春一番に音を立て」　　敬鬼
「瞼閉じ笑顔ですくむ春一番」
「飛ばされて気持ち浮き浮き春一番」
「春一番手を取りスキップ子どもたち」　加代女

蕗の薹

早春の頃、蕗の薹が玄関先に出ると春がすぐそこにあると子どもにも感ぜられたものだ。母親は、この時期蕗の薹を細かく刻み味噌とまぶして皿に薄くのばし、これを火にかけて炙ったものを出してくれた。味噌を焼くとそれ自体香ばしく美味しいが、蕗の薹をまぶすとこれに苦みが混じり、まるで春を味わうようだった。炊きたてのご飯と一緒に食べると、子どもにもまことに美味しいものだった。

「梅の根やものあり貌に蕗の薹」

日野草城の句。梅の根元に芽生えた蕗の薹をものあり顔と表し、春が来たと表した。薹というのはアブラナ類に芽生える花軸をいう。

「甦る春の地霊や蕗の薹」

杉田久女の句。蕗を大地に宿る精霊にみたてて崇める。

「土を割り季節の使い蕗の薹」　敬鬼

「幼子の指柔らかに蕗の薹」

「土の下そろそろ出番蕗の薹」　加代女

つくし

つくしは春を味わえる。あく抜きをしてから卵とじやお浸し、味噌和えにしても味わえる。春が来たことを知らせるかわいいお使い番だ。

子規は「土筆」の句集を編み、土筆（つくつくし）をよく詠んだ。

「つみもせずすわつて見るやつくつくし」

「ふむまいそ小道にすみれつくつくし」

「つくつくしゆるしてくれよ杖のとが」

これらの句はどれも微笑ましい。地面から伸びた土筆の姿が可憐なので感情移入して詠まれている。もっとも、こんな句がある。

「つれづれや病床に土筆の袴取る」

土筆の袴をとってからお浸しなどに料理するのだが、病床にあるので暇な時間はいくらでもとれると、苦笑いを浮かべた。

「幼き日ふとよみがえるつくし摘み」

「川の土手寝そべり見会うつくしかな」　敬鬼

「つくし摘み数を競える子どもたち」　加代女

すみれ（菫）

すみれを見ると、宝塚歌劇で歌われた「すみれの花咲く頃」が念頭に浮かぶ。１９３０年の上演された歌劇「パリゼット」の主題歌だったという。

すみれは江戸時代から俳句にも詠まれ、

芭蕉は、

「何とはなしに何やらゆかし菫草」、

蕪村は、

「春の水すみれつばなをぬらしゆく」

つばなとは茅花のことである。

一茶は

「地車におつぴしがれし菫哉」

と菫が荷車に押しつぶされたと詠み、その可憐な装いを傷む。

「道のきわ時は来たれりすみれ咲く」　敬鬼

「犬の子が花咲くすみれいばりせり」

「口ずさむなつかしき歌すみれ見て」　加代女

梅の香

平安時代の右大臣菅原道真は左遷され、無念のうちの京を去るときに詠んだ和歌がある。

「東風吹かば　匂ひおこせよ　梅の花　主なしとて　春な忘れそ」(大鏡巻二)。

この歌には「流され侍りける時、家の梅の花を見侍りて」という詞書が添えられ、梅をこよなく好んだことを偲ばせる。

「梅が香やどなたが来ても欠茶碗」

信州柏原の一茶の句。貧しいので縁の欠けた茶碗でしか茶が出せないが、せめて梅の香を馳走したい。

「梅か香のかすかに通ふ寝覚哉」

「さむくとも梅か香くはる風のむき」

子規も梅の香を好んだのだろうか、「梅が香」という句集もある

「梅の香や窓から流れる温かさ」

「梅の香や悼み届けよ亡き人に」　敬鬼

「光射しほのかに梅の香漂える」　加代女

光の春

光の春とは、春になると射す暖かで穏やかな日差しをいう。冬が長くて厳しいロシアの人々は待ち望んだ春の訪れをこのように表現していた。暗い春から光に満ちた春になったことの喜びを言い得て妙である。

これに関連する季語には、春の色、春望、春景色、そして春光があり、俳句にもよく使われる。春の日の光、春の日ざし、春の景色をさす。

虚子は春光を季語に次のように詠む。

「門を出る人春光の包み去る」

「蒲公英に春光蒸すが如きかな」

次は飯田蛇笏の俳句。

「春光の中に地の愛みなぎりて」

寒い冬を通り抜け、春の陽の光が人も植物もやさしく包みむように照らす様子がイメージできる。

「春光が木々あかあかと包みおり」　敬鬼

「木の梢うすくれないの春光かな」　加代女

桜餅

長女が生まれた当時は、祖父や祖母を呼んで賑やかに雛祭りを祝い、無事な成長を願った。雛祭りに定番の起こしものといわれる餅菓子や桜餅、うぐいす餅が用意された。起こしものという菓子は練った米粉を家に備えてあった木製の型番に押しつけ、鯛、扇などの形に打ち抜き、食紅で描き網焼きしたもので、近所の子どもたちと一緒に作ったことを思い出す。この起こし菓子は愛知県が発祥地であるようだ。

「さくら餅うち重りてふくよかに」

「餅肌を恋ふ葉はがしぬ桜餅」

両句とも日野草城の俳句。前句は桜餅のもち肌が女性のそれのようにふくよかと詠み、後句は餅を包んでいる桜の葉を剥がしてもち肌をめでたいと詠む。でも、桜餅は塩漬けにした桜の葉がお餅の甘さをしき立てているのが良いのだ。

「老い二人とりもつ茶に桜餅」　敬鬼

「茶を点て感じる季節桜餅」

「目と舌で季節味わう桜餅」　加代女

菜の花

菜の花の黄色をみると冬が終わり春が廻ってきたことを実感する。この期に花をつける植物にはナタネ、カブ、ハクサイ、キャベツ、ブロッコリーがあり、いずれも真黄色な花を咲かせる。菜の花畑は春の風物詩と言え、目を楽しませ豊かな気分にさせる。

「ふらふらと行けば菜の花はや見ゆる」

「菜の花のかほりめてたや野らの糞」

「菜の花や余念もなしに蝶の舞」

これらの俳句は子規の詠んだもので、菜の花という句集にある。一句では菜の花が咲いていないか探訪していたらもう見つかったと詠み、二句では野良に落ちている馬か牛かの糞と菜の花を取り合わせて菜の花を引き立て、三句では菜の花の上で無心に舞う蝶々に思いを馳せている。

「菜の花や虫も這いだし土黒し」　敬鬼

「膝を曲げ摘むや菜の花小さき手」　加代女

卒業式

自分のことになるともはや遠い過去のことになる。小、中、高、大学とそれぞれに思い出と別れがあったが、もっとも偲ばれるのはあの多感な時期を過ごした中学校の卒業式であった。ほとんどの者は進学先が決まっていたが、異性とはこれを限りに別れる者が多かったために感傷的になった。事実、この別れを最後に他界してしまい、再会できない者もいたのだった。

「これよりは恋や事業や水温む」

「運命は笑ひ待ちをり卒業す」

虚子の目は卒業より卒業後のことに向き、何が待ち受けるかと構えている。

「卒業や尻こそばゆきバスに乗り」

西東三鬼は、その日の嬉しいような寂しいような気持ちを尻こそばゆいと表現。歯科医でもあり、伝統俳句から離れた俳句で新興俳句運動の中心となった。

「卒業に悲喜こもごもの走馬燈」

「卒業や丘に昇りて誓い合い」　敬鬼

「卒業や嬉しさ淋しさ入り乱れ」　加代女

紫木蓮

勤務していた大学の構内に紫木蓮の並木が石段にそって植えられていて、3月の中旬から下旬にかけて大ぶりな紫色の花をつけ、それは見栄えのするものであった。まさに、冬が終わり暖かく明るい季節の到来と、新学期がまた始まることを告げるのだった。

「木蓮に夢のやうなる小雨哉」

「木蓮の花ばかりなる空を瞻る」

夏目漱石の詠んだ俳句。一句目は、春雨を受けると色は一段と映えるが、今まさにそれが起きていて、木蓮の花が夢の中のように輝いている。2句目の「瞻る」はまばるとよみ、見上げる意味である。樹下から見上げると木蓮の花で空が埋まっているようだ。

「華やかな貴婦人のよう紫木蓮」

「学び舎を木蓮咲きて去りにけり」　敬鬼

「木蓮や花影憩う古希二人」

「華やげり花咲きて庭紫木蓮」　加代女

水温む

毎日使う蛇口の水が冷たくなくなると春の到来を実感する。もともとは池や小川の水が暖かく感じることをいう。

「犬の舌赤く伸びたり水温む」

虚子の句。水温む暖かさを犬の舌が伸びていることに着目して詠んでいて、ユーモラスである。

「籠の鳥に餌をやる頃や水温む」

漱石も飼育する鳥に餌を与える時間には暖かくなっていると餌やりから感じている。

「親のころよりのよしみの水温む」

久保田万太郎の句。親の頃からよく使っている水が温んできた、やっと春が来たのだという実感が吐露されている。

「水草の流れおだやか水温む」

「生き生きと水盤の花水温む」

「水温む光やさしく夜半の月」　敬鬼

「水温み指で感じる心地よさ」　加代女

山笑う

冬の間黒々と見えていた近くの山が水温む頃になると白っぽく見えてくる。春の季語として知られている。

北宋の画家郭熙の画論『臥遊録』の「春山淡冶にして笑うが如く、夏山蒼翠にして滴るが如く、秋山明浄にして粧うが如く、冬山惨淡として眠るが如く」に依拠したもの。

「蒲団着て山笑ふ姿や東山」

「高縄やこちが笑へば笑ふ山」

子規の句。東山は京都にある山、高縄は郷里松山にある山、両句とも春が廻ってきたことを喜ぶ。

「逆光に山笑ひつつ暮れなづむ」

作家、詩人佐藤春夫の句。春の穏やかな西方向の山の暮れなずむ夕景を詠んだ。

「木が香り生き物蠢き山笑う」

「山笑う耳にすがしく風の音」　敬鬼

「山笑うおじいおばあ孫も笑う」　加代女

沈丁花

3月に小さな手まりのような淡いピンクの花を咲かせ、散歩していても遠くからそれとわかる強い香りがする。この名前は、香木の沈香の香りから付けられた。花を煎じた汁は、歯痛・口内炎などとして使われるようだが、赤く丸い実には毒があるという。

「人に迫る沈丁の香や手水鉢」

子規は手洗いの近くに植えられた沈丁花の香りが自分に迫り来るほどに強いという。

「せせらぎの耳に立つ夜や沈丁花」

草城は、川のせせらぎをはっきりと聞きつつ、それと同じように沈丁花の香りが夜にもはっきりとわかる。

「風にのり沈丁花やどこからか」

「あけぼのに窓を開ければ沈丁花」　敬鬼

「たそがれの垣根の隅に沈丁花」

「庭仕事手を休ませる沈丁花」　加代女

雪柳

散歩ルートのひとつに雪柳が群生している公園があり、春が来ると知らせるように、まるで雪が降り積もって垂れたように真っ白な小さい花をたくさんの枝先につける。新芽をつけた周りの新緑のなかに真っ白な布団が置かれているようだ。こごめばな（小米花）とも呼ばれる。

「井戸ばたにこほれて白し小米花」

子規の句。雪柳の花はまるでお米がこぼれているように白いと詠む。

「あたたかき試歩をとどむる雪柳」

草城の句。暖かいので試みに歩いていたら雪柳があり、歩みを止めて見た。

「玉の肌白さ競わん雪柳」

「雪柳なよなよ撓る女ぶり」　敬鬼

「雪柳風に揺らいで何誘う」

「雪柳散りしく小米掃き集め」　加代女

桜咲く

書斎から見える小公園の桜の花がほころび始めた。今年は例年より１週間程度早いようだ。桜は花が先に咲いてそれの後に葉が出る。野菜などは葉が出て十分成長してから花が咲くのとは逆だ。

サイエンスアドバイザーの佐藤公行さんによると、花が葉の展開に先行する理由は、葉の中に埋まる花よりは効率的に風や虫による受粉ができるからという。この問題は受粉の生殖過程と葉の栄養蓄積の過程に関わるものなのだという。

桜を季語とした芭蕉の俳句をひとつ。

「命二つの中に生たる櫻哉」

見事に咲いたこの桜は私の命だけでは無く私と旧友の間にともに大事なものとして生きている。

「桜花はなやぎあわれあわせ持ち」　敬鬼

「老木や精一杯の桜花」　加代女

桜の木

桜には六百ほども種類があり、ソメイヨシノ、エドヒガン、山桜、八重桜そして枝垂れ桜等々である。ソメイヨシノは、江戸末期に染井村（豊島区駒込）の造園師や植木職人がオオシマサクラとエドヒガンを交配させてつくったという。

桜を詠んだ俳句も多い。

「観音の大悲の桜咲きにけり」

子規の俳句。満開の桜は仏である観音の大いなる慈悲を表しているようで、それ自体まことに尊く感じられる。植物としての花というよりは霊性あるいは仏性をみている。

「死支度致せ致せと桜哉」

一茶の俳句。桜はなぜか死のイメージを想起させる。散り際がいさぎよく自ずと無常を感じさせるからか。

「去年今年移る世写す桜かな」

「力あり人を酔わせる桜花」　敬鬼

「桜観て昔話の老い二人」　加代女

花冷え

桜が咲く頃に寒の戻りが起きることをいい、一度仕舞ったこたつが欲しくなる。大陸の寒気が入り込むことで起きる。暖かくなったと思ったら寒の戻りが入るとひとしお寒く感じる。

「花冷えのうつだけの手はうちにけり」

「花冷えのうどとくわゐの煮ものかな」

「花冷えの燗あつうせよ熱うせよ」

久保田万太郎の3句。 万太郎は寒がりだったとみえて、寒い寒い、なにか熱いもの、そうだ酒を熱燗でと騒ぐ。浅草生まれで大正から昭和にかけての作家、俳人で下町の人情を中心に描いたといい、句に良く表れている。

「花冷えに白身の魚温い汁」

「花冷えに羽織をはおる老い二人」　敬鬼

「花冷えにしまい忘れの炬燵出し」　加代女

花吹雪

満開の桜が風に吹かれ、吹雪のごとくに花が散ることを花吹雪と言う。華麗に咲いていた桜花が一斉に散るのを見ると、その散り際の潔さにうたれる。散歩によく行く市民公園にも染井吉野やしだれ桜が並んで植わっているが、散るときは一斉で下の歩道が桜の絨毯となるのは壮観だ。

「澄む水にみよしうごきて花吹雪」

飯田蛇笏の句。水が澄む湖に浮かぶ船の舳先が滑らかに進み、そこに花吹雪が降り注いでなんとも言えず風情があると詠む。

「花吹雪狂女の袖にみだれけり」

虚子の句。能「桜川」で子どもと離れ離れになった母が花吹雪の乱れ落ちる桜川ぞいを狂乱して子を尋ね歩く場面を詠んだもの。

「花吹雪子どもの天狗見得を切り」

「花吹雪あとは若葉に譲りけり」

「花吹雪俗世のしこり流しけり」　敬鬼

「花吹雪追いかけ廻る子どもたち」　加代女

花筏

ゆるやかに流れる川の水面に散った桜の花びらが集まり筏のように流れるさまをいう。桜が散るのを惜しみ、川面を覆った風景が美しいので俳句の春の季語となる。この近辺では岩倉市の五条川は桜並木が両側にあり花見の名所で、それが川面に散ると、素晴らしい花筏になる。

花筏を季語とした句は少ない。

「ちりつみて筏も花の梢かな」

川を渡る筏には桜の花が散り積もって、まるで枝の梢のようで感興をもよおすと蕪村は詠む。

「生きざまを見せて流れる花筏」

「花筏流れあつまり別れ行く」　敬鬼

「宴終え潮引くような花筏」

「しがらみを引き寄せ載せて花筏」　加代女

八重桜

染井吉野が終わって1週間ほどすると、八重桜が咲く。この桜は枝垂れ桜で6枚以上のピンク色の花弁をつける。満開になると花の重みで枝をさらに垂らす。

これが散歩道沿いに咲くと、夜でも月明かりで明るく映え、もう一度お花見が楽しめる風情だ。かつては庭に一本の八重桜があり、飼い犬が気持ちよさそうに寝転んでいたけれども、残念ながら飼い犬が老衰で死ぬともに枯れてしまった。

「八重桜名は知らねとも鞠の如」

金色夜叉の尾崎紅葉の俳句。八重桜の花の形状を鞠のごとく見事と詠む。

「八重桜地上に画く大伽藍」

村上鬼城の句。軍人を志したが耳の病のためにあきらめ、司法代書人となり高崎で過ごす傍ら子規に俳句を習った。

「八重桜ぼんぼりのよう闇のなか」　　敬鬼

「こぬか雨それでも映える八重桜」

「八重桜舞踊の舞いの見栄を切り」　　加代女

チューリップ

我が庭で春の訪れを最初に告げる花である。プランターや鉢に昨年１２月に植えておいた球根が赤色、橙色、黄色とまさにラッパ状の花を咲かせて楽しませてくれる。

この花は商品取引の始まりとなったことでよく知られている。珍しい品種のチューリップの球根が高値で取引され、チューリップ・バブルが起きたという。１７世紀初頭オランダでのことであった。

「チューリップ紅く愉しげに咲けり購ふ」

「黒絹のうすきくつたびチューリップ」

日野草城の俳句。２句目は、フランスの小説家アレクサンドル・デュマ（大デュマ）による小説を下敷きにしている。黒いチューリップの開発と陰謀、男女の悲恋を描いたもの。

「チューリップ花繚乱色くらべ」

「朝と晩開き結びつチューリップ」

「陽と影の七色変化チューリップ」

敬鬼

「チューリップ形をつくる子どもの手」　加代女

春霞

散歩で見慣れた遠くの山が霞んでいる。春霞だ。春まだ浅い季節に水蒸気によって視界が朝夕に悪くなることをいう。小さな水滴が大気中に漂い、気温差が大きいと水滴が冷やされて霧とか靄とかが生じる。同じ現象を夜は朧、朧月のようにいう。「霞」は日中のことを、「朧」は夜のことをいう。

「かすむやら目が霞やらことしから」　一茶

一茶は目のかすみと大気の霞みをかけて、戯けている。

「こつねんと塔うかびたる霞かな」

久保田万太郎の句で、塔がいきなり霞みの向こうにあらわれた。

「春霞気分もの憂く朝寝かな」

「遠ざかる教師の声も春霞」

「春霞遠くの山も墨絵風」　敬鬼

「うとうとと夢に誘うか春霞」　加代女

椿

乙女椿はピンク色の八重の花をつけた可憐な印象を与える花で、毎春、庭で咲いて楽しませてくれる。常緑樹で樹高が５メートルあるいはそれ以上になる。花は春に咲き、紅、白、斑入りなどがある。椿は日本原産で、日本書紀や万葉集にも記載され、茶道にも好んで用いられた。

「藪椿門は葎の若葉かな」

やぶ椿は椿の別称で、芭蕉は生い茂って藪（もぐら）の若葉と対比させ、椿の花に感じいっている。

「はなびらの肉やはらかに落椿」

椿の花はぽとりと首が落ちるように散る。その落花をまだ柔らかだと飯田蛇笏は表現した。

「落椿かかる地上に菓子のごとし」

西東三鬼もそのままの形で落ちた花を和菓子のごとしと見た。

「頬染める乙女椿の艶やかさ」　敬鬼

「艶然と乙女椿や陽を受けて」　加代女

木の芽とき

樹木に新芽が出る４月中頃で、けっこう風が強いことが多い。欅や柳が芽吹きはじめ。桜花とは別に春の到来を感じるが、何とは無く鬱状態になることもある。

「がうがうと欅芽ぶけり風の中」

石田波郷の俳句。波郷は大正２年愛媛県の生まれ、戦後も加藤楸邨、中村草田男らとともに人間の心情に根ざした作風で人間探求派と呼ばれた。欅は空に広げた枝に春先の強い風を受け新芽が音を立てている。

「ある日は人のこひしさも木の芽草の芽」

「ふるさとは遠くして木の芽」

種田山頭火の２句。木の芽時は、いつも一人でいても人を恋しくなるし、遠いふるさとを偲ぶという。

「木の芽とき地中の虫も蠢き出し」

「枝透かす陽のやわらかさ木の芽とき」　敬鬼

「木の芽とき遠くの友に便り書き」　加代女

春眠

「春眠 暁を覚えず　処処 啼鳥を聞く　夜来 風雨の声」。冒頭の「春眠あかつきを覚えず」にあるように、広く知られた漢詩で、８世紀初頭の唐の時代の孟浩然の作になるものである。実際、早春になると、自然と眠りから覚めず寝過ごすことも多い。

「春眠のさめぎわかとぞながめける」

佐藤春夫も眠りからの覚め際と自覚し、あたりを眺めていると詠む。佐藤春夫は小学校にいる頃、校歌の作詞に来て講堂で講話したことを思い出す。

「春眠や靉靆として白きもの」

虚子も霞がたなびいてぼんやりいる靉靆ように、目覚めもぼんやりしている。

「春眠をむさぼりて悔なかりけり」

万太郎は、眠いのだから寝ていよう、悔いはおきないからと自分の身体に合わせている。

「春眠や布団の中の雨の音」

「春眠や暁破る猫の声」　　敬鬼
「春眠や夢かうつつか響く声」　　加代女

春雨

春は雨がよく降るので、春に降る雨は春時雨（晴れたり降ったりする雨）、小糠雨（しとしとと降る雨）、桜雨（桜が咲く頃に降る雨）、春霖（春の長雨）があり、春の雨の風情を伝える。

「春雨や暮れなむとして今日も有り」

蕪村の句。春先に雨がふり今日という日も暮れていく。

「降つてゐるその春雨を感じをり」

虚子の句。静かに降る春雨そのものを感じ取っている。

「春雨や柳の下を濡れて行く」

漱石は、新緑に芽吹きはじめた柳に春雨がかかり、いっそうその新緑を鮮やかにすると見た。

「春雨やしなやかに降り土黒く」

「春雨に濡れて肩組む友二人」　　敬鬼

「春雨や濡れても一句吟じよう」　　加代女

草萌ゆる

春になって草の芽が萌え出るころから、庭、公園、そして畠の土が黒くなり、そこに多くの雑草が芽を出し始め、土の黒と草の緑がよい対比となり、人の気持ちを落ち着かせる。

「其中一人いつも一人の草萌ゆる」

「おちついて死ねそうな草萌ゆる」

2つとも漂浪の俳人山頭火の句。いつもひとりで生きていても草はその時期になるとちゃんと生えてくる、あるいは草萌ゆるのなかで過ごすと落ち着いて死ねそうなくらいと心情を詠む。

「草萌ゆる畠におりて土起こす」

「飛び石の間あいだに草萌ゆる」　　敬鬼

「卒業し旅立つ若者草萌ゆる」

「縄跳びに跳ねる大地の草萌ゆる」　　加代女

メタセコイア

市民公園の野球場を取り囲むようにメタセコイアが植えられている。樹高は２０ｍもあるだろうか。いま、枝ごとに小さな新芽がいっせいに吹き出し、樹木全体にまことに鮮やかな新緑だ。

日本では六五００万年前、化石としてのみ発見され、絶滅した樹木とされたが、１９４５年に中国四川省で現存していることが確認され、１９４９年に挿し木と種子が移入され全国の公園や学校に植えられたという。私が勤務した大学の敷地にもその頃植えられ大木になっていたが、研究棟の新設に際して切り倒されたのは残念なことであった。後に、別のキャンパスに移動し、メタセコイアが何本か植えられていたのを見て感動した。

メタセコイア、曙杉、あるいはイチイヒノキはいずれも季語になってはいない。強いて季語を指定すれば春がふさわしい。なんといっても仲春の鮮やかな新芽が美しいからだ。

「メタセコイア空に向かいて新芽吹く」
「枯らした葉芽吹かせ復すメタセコイア」　敬鬼

浅蜊採り

潮干狩りは、３月に入ると始まり５月終わり頃まで主に浅蜊採りで行う。これは海に近いところに住む者にはこの時期の風物詩で、毎年、どのくらい採れるか、採った浅蜊をどうやって食べようか、味噌汁に入れるか、バターで焼くかとこれも楽しみである。

「すなにさりさりとあさりあさるほどにあわれ」

荻原 井泉水は、日本の自由律俳句の俳人、俳論家。尾崎放哉や種田山頭火らを育てた。浅蜊を夢中に採っている人を、そして採られる浅蜊をあわれと見ている。

「蛤に劣る浅蜊や笊の中」

虚子の句。ひとつの籠の中、蛤と浅蜊を見比べている。

「腰伸ばししばし沖見る浅蜊採り」
「浅蜊採りのたりのたりの小波かな」　敬鬼
「海砂のあちこちの泡浅蜊採り」

「子どもらが数を競いつ浅蜊採り」　　加代女

入学と新学期

４月、学校は新学期となり、新入生を迎え、クラス替えもある。小、中、高校での体験、とくにクラスメートとの交友が一生の宝となる。学校は新学期を迎えるたびに生徒、教師、そして友をリフレッシュしている。

「ランドセル負ひ反りかへり入学す」　」

「一本の前歯がぬけて入学す」　」

「一生の友の従兄と入学す」

上野泰は、虚子の六女と婚姻し、『ホトトギス』に参加、野見山朱鳥と並び賞され、新感覚派と呼ばれるようになった。３句とも泰の俳句で、小学校に入学しいろいろと学んで行く学童の初々しい姿を詠んだ。

「新学期新教科書新鮮に」

「新学期ひとみ瞳の黒板かな」　　敬鬼

「見渡せばみんな微笑む新学期」

「友に会いうれしさこみ上げ新学期」　加代女

朧月夜

春、霧や靄にかすんで見える月のことである。作詞高野辰之、作曲岡野貞一のコンビによる小学校唱歌「朧月夜」がある。

「菜の花畠に、入日薄れ、
見わたす山の端、霞ふかし」

このコンビによる唱歌には、「兎追ひし彼の山」の出だしで有名な「故郷」がある。

「指貫さしぬきを足でぬぐ夜や朧月」

蕪村の俳句。指貫とはすそがひもでくくれるはかまのことで、きっと月を見て歩き回ったので疲れたのか、袴を足で脱ぐ。

「待合の門を出づれば朧月」

物理学者で随筆家の寺田寅彦の俳句。待合茶屋で遊興後に門を出、朧月を目にしてその風趣に感動している。

「朧月誘われ歩く老い二人」
「朧月はなし声する窓の外」　敬鬼
「梢こし話してみたい朧月」　加代女

花桃

団地の或る家の庭に植えられた花桃が満開となり、今年は陽気が良いためもう散り始めた。この樹木の花は強いピンク色でしかも枝にびっしりとつくので大変に華やかだ。

この地域の近くの名所である南信州阿智村の月川温泉が花桃の里として知られ、5月の連休の頃は4キロにわたって川沿いに花桃が咲き、見事な眺めだ。数回、五月の連休あけ、花桃が盛りを過ぎた頃、テニスの同好会で合宿をしたことがあるが、そのときの里の風景は印象に残るものだった。

花桃は季語ではないので。ここでは桃の俳句を引く。

「喰うて寝て牛にならばや桃の花」
蕪村の俳句。なにも望まず桃の花に身をまかせたいという心境。

「うたゝねの窓に胡蝶やもゝの花」
子規の俳句。ここでも桃源郷の心境が詠われている。

「花桃に囲まれ遊ぶ夢うつつ」　敬鬼

杉の花

黄金週間にわれわれ夫婦と娘は、息子夫婦と孫を訪ねるべく東京を経て宇都宮に旅行し、鬼怒川温泉に2泊した。これはわれわれ夫婦には新婚旅行をワンスモアであった。４８年前のことだ。それだけ懐かしくもあり楽しみでもあった。

宇都宮から日光市への途中、大きな杉並木の街道を通過した。これは家康の近習を勤めのちに大名となった松平正綱が２０年余りの年月をかけて２０万本以上もの杉を植樹し、家康の３３回忌の年に日光東照宮の参道並木として寄進したもので、今では樹高約３０ｍにも成長している。

杉の花の季語は春である。

「峡深き日はうつうつと杉の花」

西東三鬼の句である。杉の大木で谷がうっそうとし、そこに杉の花が風に舞っているという意味だろうか。

「杉並木昔の面影今もあり」　敬鬼

夏

葉桜

花を咲かせた桜木も美しいが、花を散らし、その直後から枝えだに若葉を芽ぶかせたときも、春から夏への移り変わりを感じさせてまことに感興がある。書斎からみえる公園の５、６本の古木も精一杯の若葉を付け、それは初夏の訪れを告げる。葉桜は夏の季語である。

「葉桜の木の下風や釣の糸」

明治期の文壇に重きをなし金色夜叉を執筆した尾崎紅葉の句。のどかな風に釣り糸がゆれる初夏の風物詩を詠んでいる。

「葉桜や人に知られぬ昼あそび」

永井荷風はフランス文学者そして作家、また戦前から戦後４０有余年の断腸亭日乗の日記の作者でもある。昼遊びは何かわからない。でも葉桜の下で洒脱な遊びをしていることだろう。

「小供の声をちこちに葉桜照れり」

山頭火の俳句。葉桜も子どもも命が息吹くようだ。

「葉桜や行き交う人も緑浴び」　　敬鬼

「葉桜や緑みどりの樹影かな」　　加代女

新緑

桜、柳、プラタナス、メタセコイアなど一斉に芽を吹き出し、その若緑はフレッシュでまことに美しい。野球場のまわりにはメタセコイアが取り巻くように植えられ、秋に葉をすべて落とした枝にこの時期に新芽を出す。気分も空気も新鮮に清浄になる。

「新緑の雨に紅茶のかんばしく」

「銀閣は古びつくしぬ新緑に」

「新緑やうつくしかりしひとの老」

日野草城の3句。新緑と紅茶、あるいは銀閣、あるいは人の老いを対比し、芳しく、新鮮にそして美しいと詠む。

「新緑の山となり山の道となり」

尾崎放哉の句で山頭火と並ぶ自由律俳句の漂泊の俳人。山全体が新緑に覆われ、その山道も新緑一色だと感嘆している。

「新緑のトンネル歩く老い二人」

「新緑や香りも色もみずみずし」　　敬鬼

「新緑の木の葉つやつや照り返し」　加代女

風薫る

5月になると、若葉や青葉の上をわたって吹く風は肌に優しく、花の香りも運んでくるので香しい。「風薫る」あるいは「薫風」は夏の季語となる。

「花びらに風薫りては散らんとす」

漱石の俳句。花の香りは風に移り、そのまま花びらは散りゆくようだという。初夏の気持ちよく静かなおもむきが伝わってくる。

「先生はふるさとの山風薫る」

草城の句。ものごとを考えさせる師はいまでは故郷の山となる。そこからの風は麗しく香しいと詠嘆する。

「空と土生き物跳ねる風薫る」

「風薫りのほほんとする草の上」

「無二の友亡き人偲ぶ風薫る」

「旅立ちの背中にやさし風薫る」　敬鬼

「風薫る小道の散歩二人連れ」　加代女

鯉のぼり

鎧、兜、刀、武者人形や金太郎を模した五月人形などを室内に飾り、外には鯉のぼりを立てる。清正人形や鯉にまたがる金太郎人形を幼き頃に飾ってもらったことを想い出す。７０年も前のことだ。同じ人形を自分の男の子にも飾った。

この黄金週間は、家族で旅行したり、帰郷したりするので子どもが親と一緒に遊んでいるのを公園で見るのは少ない。それでも夕方散歩すると、何家族かがサッカーボールを親子で蹴り回したり、キャッチボールをしたりして、子どもが歓声を上げていて微笑ましい。

「鯉幟地平線てふもの見たし」

中村草田男の句。鯉のぼりの身になり、せっかく高く昇っているので地平線を見てみたいと戯ける。

「一汁一菜一能に足るよ鯉幟」

これも草田男の句。鯉のぼりに話しかけ、私は一汁一菜と一技一能に満足すると。

「高く揚げ運気呼び込む鯉のぼり」　敬鬼
「大口で幸せ呑み込む鯉のぼり」　加代女

潮干狩り

三河湾は干潮時遠浅になるので潮干狩りが5月頃まで盛んである。熊手をもち浅蜊やバカ貝を取りに行く。採った浅蜊などは、一晩、砂抜きをして味噌汁に入れて食べると潮の味がして美味である。

「深川や桃の中より汐干狩」
一茶の江戸滞在中の俳句で、江戸っ子も浅蜊を好んだことがわかる。この時代、深川で浅蜊が採れたようだ。

「津の海のしりぞきにけり汐干狩」
草城の句。ここでいう津は地名ではなく、舟の着く所といった意味で使われている。干潮を海が退くと表現。

「潮干狩り青く溶け込む空と海」
「縄文の暮らしのごとし潮干狩り」　敬鬼
「潮干狩りもこもこ動く砂の中」

「潮干狩り数を競った友と我」　　加代女

藤の花

5月上旬、藤棚から薄紫色の藤の花が垂れ、１m近くに達することもある。散歩でよく行く公園にも藤棚があり、この時期、その花を見たり香りをかいだりするのが楽しみだ。

「まだ風のたけも短し藤の花」

子規は藤の花を詠んだ俳句が多い。これもそのひとつで垂れた藤の花の丈がまだ短いが、それでも風に吹かれて揺れ、風情がある。藤の枝は年々少しずつ長くなる。

「反橋や池を巡りて藤の棚」

これも子規の句。池にそり橋が架かっていて、それを昇り降りおりし池の周りの藤の花を見て歩くのは楽しい。

「色は青風は緑に藤の花」

「藤棚や顔寄せ語らう古希二人」　　敬鬼

「風に揺れ日舞のよう藤の花」　　加代女

万緑

書斎の窓から見える木々の緑は若緑から濃い緑色へと変身している。見渡す限り緑に覆われたこんな光景は万緑と呼ばれる。この表現は言い得て妙なるところがあり、歳をとると今年もこの季節を迎えたなと感に迫られる。

周りが万緑の中鮮やかな深紅の花が咲いていると、１１世紀の北宋の詩人王安石は、「万緑叢中紅一点」のごとしと表した。万緑はここから広く膾炙されるようになった。

「万緑の中や吾子の歯生え初むる」

中村草田男の句。我が子の歯が生えはじめた。それをみると、吾子もそして生きとし生きるものすべてに命の躍動を感じるという。

「万緑の中不浄心直ぐに消す」

山口誓子の句。けがれた心を抱き穏やかでないときも、この若緑に覆われた木々を見ると、その樹木の精を吸い込んで癒やされる。誓子は高浜虚子に師事、後に水原秋桜子とともに新興俳句運動の指導的存在となった。

「万緑や孫の歯抜けて上に投げ」　敬鬼

泰山木の花

玄関脇に二十年前に植えた泰山木があり、6月には白い大きな盃のような花を7つ8つと咲かせる。この花は一日くらいしかもたずに黄色くなり落下するが大木になるとひと月くらいは次々と花をつける。

これはモクレン科の常緑の高木で公園の木などは２０ｍくらいになる。名からすると中国原産のようだが、実際は北アメリカの南部原産である。花が白くて大輪であり大きく、またその芳香が強いことが特徴だ。

「上層中層下層泰山木咲きぬ」

中村草田男の句。泰山木の花は、枝の先にも、低い枝にも、真ん中の枝にもつぼみを付け、それが大輪になる。離れてみるとそれは見事なものだ。

「墨かをり泰山木の花かをる」

日野草城の句。静かに墨を擦りそれが香りはじめたら、どこからか泰山木の良き香りも感じ、いっそう感興を引いた。

「座すごとく枝先白し泰山木」　敬鬼
「梅雨空に強き芳香泰山木」　　加代女

栗の花

栗の花が真っ盛りだ。花は白く長く穂のように密集して樹上に花開いている。白い花は雄花で雌花はその付け根のあたりに小さく咲く。受粉した雌花から栗ができる。

私の出身地の近くの小布施町は栗菓子でよく知られている。ここには江戸から避暑にきた葛飾北斎の大天井画が残る。これは葛飾北斎最晩年の大作「八方睨み大鳳凰図」で１６０年以上も前の制作、北斎は８９歳のときのものという。栗を食いながら制作したなんて考えると楽しくなる。小布施をさらに北に進むと小林一茶の柏原がある。この辺り北信濃は江戸期文化盛んなところだったようだ。

「くりのはな覚束なくもこぼれけり」

子規のこの句はこぼれるようにしかも頼りなく咲いた栗の花の様子を描写した。

「栗の花つひて落ちけり蛇の皮」

これも子規の句で。落ちた栗の花がまるで蛇の皮のように地に横たわると詠む。

「栗の花垂れて匂いもこぼしけり」　敬鬼

夏草

夏に生い茂る草全般をいい、とくに植物が特定されていない。夏草では、芭蕉の奥の細道に詠まれた「夏草や兵どもが夢の跡」がよく知られる。これは義経主従の最後の地で詠まれた句で、主従らの哀れな運命に思いを馳せている。

芭蕉は、この句の他に夏草を季語にした次の句も詠んである。

「夏草に富貴を飾れ蛇の衣」

大津の庵に在住していた頃の俳句で、周りには夏草しか生い茂っていないが、しかし蛇の抜け殻が飾られていてまるでお大尽のようだ。

「夏草お墓をさがす」

山頭火の俳句。夏草に埋もれたお墓を汗垂らして探す光景が目に浮かぶ。

「夏草や子らの行き交う帽子かな」

「夏草や虫取り網の先動く」　敬鬼

「夏草を踏み分け追うか爺と孫」　加代女

桜鯛

桜の花が咲く頃、海の浅瀬で釣れる鯛のことである。数年前までは釣り好きの友人に連れられてハマチやヒラマサ釣りに伊勢に出かけ、その友人は見事に真鯛も釣り上げた。桜色を濃くした色の鯛で、そのうちの１匹を刺身にして食し、まことに美味であった。

「俎板に鱗ちりしく桜鯛」

子規の句。鯛の鱗は硬く大きく、鱗落の包丁で鱗を削ぐと、まな板や流しに白い鱗が散り落ちる。それをこんなにも鱗があるかと詠嘆気味に詠んでいる。

「夫婦箸の在り処おぼろや桜鯛」

草田男の句。夫婦で桜鯛を食するのに、鯛に気を取られて互いの箸の有りどころがはっきりと見えない。

「朝の海鱗光らし桜鯛」

「釣り上げて眼ぎょろぎょろ桜鯛」　敬鬼

「病い癒えめでたき膳や桜鯛」　加代女

わらび

中学生の頃、北信濃の飯縄高原でわらび取りをした。一の鳥居をくぐり少し昇って脇に逸れると、にょきにょきとあちらにもこちらにもわらびが生え出でていてまさに山の恵みを頂戴するといった趣がある。持参した袋に一杯のわらびを採った。母はそれをあく抜きし茹でておしたしにし、家族皆で食べたことを思い出す。

「折もてる蕨しほれて暮遅し」

蕪村の句。江戸時代でも春にわらび採りがあり、持って帰る間にしんなりとしてしまったという。

「一鷹を生む山風や蕨伸ぶ」

飯田蛇笏の句。鷹が住む山から吹く風の下、地面ではわらびがしっかりと伸び、もう春が来ていると詠む。蛇笏は虚子に師事、山梨の山村で暮らしつつ大正の「ホトトギス」隆盛期の代表的俳人。

「わらび茹でほのかに薫る山の幸」　敬鬼

「わらびとり数を競う親子かな」　加代女

豌豆

昨年の１１月に植えたエンドウが４月に入り白い花を咲かせ実を付けはじめた。エンドウは味噌汁に入れても、また卵と和えてもしゃきしゃきとほんのり甘みがあっておいしい。古代オリエントの時代から栽培されているという。栽培したのは絹さやエンドウで莢は緑があざやかで柔らかく、ひとつの蔓にたくさん成る。

「まがると風が海ちかい豌豆畑」

山頭火の句。歩いていて角を曲がると風が海の匂いを運び、緑のエンドウ畑が見えた。海とエンドウ畑ののどかな春の風景をイメージさせる。

「豌豆のさく土ぬくく小雨やむ」

蛇笏の句。エンドウが咲いている。触れた土は暖かい。降っていた小雨もやんだと春が来たことを詠む。

「豌豆や白き花から莢みどり」　敬鬼

「豌豆の実になる頃や里心」

「葉の陰のえんどう見つけ笑顔の子」　加代女

牡丹

牡丹は庭の一隅に咲いていても華やかだ。とくに深紅の花は百花の王あるいは富貴の花にふさわしい姿形をもつ。

牡丹によく似ている花に芍薬がある。牡丹と芍薬は両方ともボタン科に属するが、牡丹は木で落葉し、芍薬は球根で赤い芽を出す。

「咲きにけり唐紅の大牡丹」

子規の句。牡丹には、白、黄色、紫色などがあるが、なんと言っても花の王者にふさわしいのは深紅すなわち唐紅の牡丹である。

「たわたわとして咲き倦める牡丹かな」

草城は、牡丹の花は茎をたわむほどに大きく華やかに咲くが、しかし眺め飽きてしまうものだという。

「庭一隅唐獅子脇に牡丹かな」

「花魁をふと思わせる牡丹かな」

「紅牡丹絵筆華やか画布のうえ」　　敬鬼

「陽を浴びて見てよと笑う牡丹かな」　加代女

こどもの日

日本における国民の祝日の一つ。「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する日」とお題目にあるが、昨今は子ども虐待が絶えなく、子どもの人格がないがしろにされ、次代を担う世代をこんなことで失うのは残念至極だ。

わが家でも男の子に鯉のぼりを立て祝日を祝った。風に乗り勢いよく五月の碧い空の下を泳ぐ真鯉や緋鯉に歓声が上がったことを思い出す。子どもが幼い間は、その歓声を当て込んでポールを立てていたが、成長するにつれて立てなった。

「揺れつつ海へ伸びゆく道や子供の日」

草田男の俳句。車で海へと伸び続く道をこどもの日に揺られていたという子どもの将来を末広がりと望むのびやかな句。子どもは次代を担っているので、伸び伸びと大きくさせたいものだ。

「こどもの日キャッチボールの親子かな」

「こどもの日孫の行く末もの思う」

「毎日がこどもの日にと孫の言い」　敬鬼
「旅支度孫に会いたしこどもの日」　加代女

さつき（皐月）

吾が庭の石垣の間にもさつきが植えられ、丸く剪定されているので、大きな丸状に見事な花を毎年咲かせる。この時期は楽しみである生け垣あるいは盆栽などでお馴染みの植物である。

旧暦の皐月 の頃に一斉に咲き揃うところからさつきと呼ばれる。躑躅はこれより数週間早く咲く。

「吾病んで猶別れうき皐月かな」

子規は結核菌が脊髄の骨を侵すカリエスを病み膿の痛みに毎日耐えていたといわれる。皐月の花を愛おしんで詠んだ。

「つゝじ散り皐月つゝじはまだの頃」

虚子の句。つつじが咲き終わり、さつきが咲くまでの間を待ち遠しいと詠む。

「さつき咲き風情艶やか時満つる」

「風さやく緋の色纏うさつきかな」　敬鬼

「生け垣に緋色の鞠のさつきかな」　加代女

あやめ

5月上旬から中旬にかけて庭の紫陽花も鮮やかな紫色の花をつける。全体に網目模様で外側の花びらに黄色い模様があるのが特徴だ。あやめは菖蒲や杜若と異なり乾いた所で育つ。郷里の庭にも植えられていたので、懐かしい花のひとつだ。英語ではアイリスと呼ばれる。

「思ひよるいづれかあやめかきつはた」

子規は、あやめもかきつばたも優劣はつけがたい美しさだとことわざに因んで詠む。

「芍薬を捨てゝあやめを挿しにけり」

一方、久保田万太郎は、この時期に華やかに咲く芍薬よりは気品のあるあやめを好むという。

「あさまだき草にあやめのこむらさき」

草城の句。朝の明け切れていないほの暗い頃、あやめの濃い紫は目立っている。

「一群の群青あざやかあやめかな」

「あやめ活け静かさ誘う部屋の中」　敬鬼

「雨に濡れなお鮮やかにあやめかな」　加代女

母の日

母の日の起こりは、アメリカの南北戦争中に敵と味方双方の負傷兵の衛生状態の改善のために運動したアン・ジャービスの娘のアンナが、亡き母親を偲んで教会で白いカーネーションを贈ったことからはじまったとされ、日本やアメリカでの母の日の起源となった。五月第２日曜日は、母への感謝を表す日となり赤あるいは白のカーネーションを贈る習わしがある。

「母の日やけふは熟路を歩まんか」

草田男の句。塾路とは通り慣れた道を言うので、母に認められる真っ当な道を歩いて行きたい。

「母の日の妻より高き娘かな」

草城は母より背の高くなった娘から、育てた母の慈しみを思う。

「母の日に面影偲ぶ番茶かな」

「母の日に心残りか菊供え」　敬鬼

「あれやこれ後悔ばかり母の日」　加代女

梅雨入り

６月に入り、じっとりと蒸し暑く、しとしとと長雨の降る日が多くなった。梅雨だ。中国大陸東部から日本の東方沖に前線が停滞することで雨季となる。これが６月中旬頃、ちょうど梅の実のなる頃なので梅雨と呼ばれる。子どもの頃はしとしとと長雨が続き、カビが生えるといった梅雨であったが、この頃は短時間多く降る豪雨型に変わってきて被害も多い。温暖化によると実感する。

「樹も草もしづかにて梅雨はじまりぬ」

草城の句。ひと昔前の梅雨のはじまりを詠む。

「十薬の花まず梅雨に入りにけり」

万太郎の句。十薬とはドクダミのこと、１０種類の薬効を有しているから「十薬」と名づけられた。家の庭にも、道ばたにも毎年、この時期に白い可憐な花をつけ、梅雨になったと実感する。

「梅雨入りやとりどりの傘登校す」

「花可憐庭の十薬梅雨の入り」　敬鬼

「梅雨入りや傘ひとつのみ二人連れ」　加代女

父の日

母の日ほどは祝われないが父の日もある。もっとも、プレゼントを子からもらったこともないし、祝いの膳に招待されたこともない。まあ、わが家ではスルーされた日である。

いわれは次のようだ。南北戦争の後、過労で亡くなった母に代わり男手ひとつで育てられたソノラ・スマート・ドッドが父に感謝する日をと牧師協会へ嘆願して始まったという。１９６６年、ジョンソン大統領は、６月の第３日曜日を父の日に定め、アメリカの国の記念日となっている。母の日の花がカーネーションなのに対し、父の日の花はバラである。

「朝の蚊を逐ひつつ病めり父の日も」

草城の句。病気に苦しんだ身には父の日も、いまいましい蚊を追うことしかしない。

「祝いたし元気な頃に父の日を」

「父の日や命日遠くなりにけり」

「父の日やご恩のお礼遅ればせ」　　敬鬼

紫陽花

梅雨の季節の花はなんといっても紫陽花だ。家の庭にも植えてあり、結構長く咲いている。あじさいの語源は、「藍色が集まったもの」を意味する「あづさい」からきているらしい。

この花はその色が少しずつ変化する珍しい特徴がある。最初は薄い黄緑色を帯びており、アントシアニンが合成され、赤や青に色づいていく。さらに日が経つと有機酸が蓄積され赤味を帯びるようになるという。

「紫陽花やきのふの誠けふの嘘」

子規の俳句。紫陽花の色が変化することを人に例えている。きのうの誠、今日の嘘とはい得て妙だ。

「けふや切らんあすや紫陽花何の色」

これも子規。切る時を逡巡する。というのも紫陽花が色を変えるから。

「読み終えてふと目をやればガク紫陽花」　　敬鬼

「紫陽花や紅茶を楽しむ老い二人」　　加代女

「雨に濡れなお艶やかに紫陽花かな」

くちなし（梔子）

庭のくちなしは6月から7月にかけて生け垣や庭の片隅に香りのいい白い花を枝先につける。花弁は小さな6弁で、夜になるといっそう香る。果実が熟しても口を開かないことから、「口無し」の名がついたともいわれる。果実にはカロチノイドの一種・クロシンが含まれ、乾燥させた果実は古くから黄色の着色料や黄疸などの生薬として使われる。

「薄月夜花くちなしの匂ひけり」

子規の俳句である。霞のかかった月夜の晩にどこからか香りを発する花くちなしに気がついて興趣を感じると詠む。

「くちなしを艶なりといふ肯はず」

虚子は、夜目にも白くしかも艶然と匂うくちなしを、本当に人の言うとおりだと肯定している。

「くちなしや青の時代の香りかな」　敬鬼

「くちなしの香り楽しや月の夜」　加代女

6月も終わり

今年も半年が経過してしまった。この間お正月を迎え、家族でハワイ旅行をしたのに月日の経つのは容赦が無い。夏至も過ぎ、盛夏に向かっているのは、連日の蒸し暑さから実感できる。

若い頃は、夏の到来がなぜか楽しめたが、古希を過ぎた頃から何かに急かされる。きっと、我が持ち人生が短いことがその原因だろう。

「六月を奇麗な風の吹くことよ」

子規の俳句。6月の盛夏を迎える前、肌を撫でる風が気持ちのよいと詠んでいる。

「六月の海見ゆるなり寺の庭」

これも子規の句。高所にある寺の庭からの見通しのきく大気を通して海の広い光景が気持ちを和らげる。

「六月もあと一日ぞ息を継ぐ」　敬鬼

「六月やホースの先の虹の玉」　加代女

金魚

子どもが小学校の頃、水槽で和金と出目金そして尾ひれの長い琉金を飼ったことがある。浄化装置を入れ、水草と砂や砂利で金魚が隠れる場所も作った。のんびりと優雅に泳ぐ金魚を、家族で餌やりと水替えをするのは楽しいひとときであった。でも、そのうちに皮膚がただれたようになり、死んでしまった。細菌感染だった。

「さゝやかな金魚の波や山つゝし」

子規の句。池に飼われている金魚の泳ぎで立つ小波と躑躅の深紅の花を対比させイメージが鮮明に浮かぶ。

「子子も金魚も同じ浮世かな」

子子はボウフラのことで、この小さな生き物も金魚もそして詠み手も現世に共存している。これも子規の句。

「一服の清涼剤や金魚鉢」

「小さな鉢広く泳げる金魚かな」　敬鬼

「親しさも人一倍の金魚かな」　加代女

夏来る

まだ暗い中に届く朝刊を読んでいると夜の黒々とした空がぼんやりと薄い紫となり、そのうちに橙色が増して金色の夜明けが来る。煎茶を喫しながらその変わりゆく様を見るのは、今日が始まったと実感できる楽しいひとときだ。

「山ふかむほどに日鮮か夏来る」

飯田蛇笏は、虚子に師事、終生、山梨の山村で暮らし大正から昭和にかけて格調のある俳句を発表した。この句では、周りの山々が目に鮮やかになるほど緑を増し、夏が来たことを実感すると詠む。

「毒消し飲むやわが詩多産の夏」

草田男は、「夏が来た、さあたくさん俳句が詠める、そうだ、腹下しをしない毒消しを飲んでおこう」。

「おそるべき君等の乳房夏来る」

西東三鬼は若い娘が薄着になり健康な乳房が目立ち、圧倒される自分がいると詠む。

「若々し肌も芳ぐわし夏来る」

「緑陰に憩う二人の夏来る」　　敬鬼

土用丑

わが家はこの土用の日ばかりは鰻の蒲焼きを近所の専門店で焼いてもらい食することにしている。この店は、生きた鰻を生け簀から取り出し、その場ではらわたを裂き、じゅうじゅうとタレをかけて焼いてくれるが、くねくねと抵抗するうなぎを見るのはかわいそうだった。

土用は古代中国の五行説による暦の設定である。春に木気、夏に火気、秋に金気、冬に水気を割り当て、これらの季節の変わり目には土気を当て、これを土用と呼んだ。土用の丑には江戸時代の天明頃から栄養価の高い鰻を食べる風習があるという。

「鰻まつ間をいく崩れ雲の峯」

子規の句。鰻が焼き上がるのを待つ間にも雲の峰が崩れて天気が変わる。

「生くることもとよりかなし鰻食ぶ」

上田五千石の句。東京都出身の俳人。秋元不死男に師事。「畦」創刊主宰した。食べられる鰻も、それを食らう人も生きることはともにかなしい。

「土用丑とんだ災難身をくねり」　敬鬼

「夕間暮れにおいもご馳走土用丑」　加代女

夕立

夏、暑熱にうだる午後、入道雲が黒雲に変わったと思ったら雷が鳴り、激しいにわか雨となる。急いでテニスをやめて休憩所で雨宿りをし、おしゃべりをしている間に雨脚が遠ざかり、またテニスに興じる。こんなことがよくあった。

「夕立のくるやあれあれ向ふから」

子規の句。夕方、気がつかないうちにあれあれ強い雨となった。

「乾坤に夕立癖のつきにけり」

虚子の句。乾坤とは易の卦のことばで天と地のことをいう。最近、天は癖になったのかよく夕立となるな。

「夕立が洗つていつた茄子をもぐ」

山頭火の句。夕立でいっそう紫色が輝き、おいしそうな茄子をもいでいる自分。

「夕立や大気の暑熱冷ましけり」

「夕立が降り残してや犬の小屋」

「夕立の虹の橋のぼるペットかな」　敬鬼

「夕立の雨粒跳ねり小びとよう」　加代女

冷ややっこ

初夏、暑さが感じられるようになると、夕飯の冷や奴が美味しくなる。刻みねぎと茗荷をのせ醤油をかけて食する豆腐は、舌を冷たく刺激して、簡素ながらその豆腐の素朴な味とともに美味しい。これに冷たいビールを併せると、夏来たる、と感じる。

日野草城は冷や奴が好物とみえ、冷や奴の俳句を次のようにいくつも詠んだ。

「うすまりし醤油すずしく冷奴」

「冷奴くはぬ日はなし夏深く」

「口中に漂ふ柚の香冷奴」

「一盞に不遇は言はじ冷奴」

この最後の句で一盞とは一杯の酒をいう。一杯の酒と冷や奴で運の悪さはとんでいくと詠む。

「冷ややっこつるり冷やりと喉を越し」　敬鬼

「胃の中の暑さを消すや冷ややっこ」

「からだ冷え食欲もどす冷ややっこ」　加代女

七夕

父は洋品店を経営していたので、大売り出しを兼ねて笹飾で店頭を飾っていた。家でも小さな笹をもらってきて子どもたちは短冊に願いことを書いて飾った。何を願ったのか思い出せないが、墨をすって筆で書いていた。家ですることの少なくなった行事だ。七夕が終わると近くの川に笹飾りを流した。

子規には七夕を詠んだ句がいくつかあり、次の3句もそれらである。

「うれしさや七夕竹の中を行く」

「よもすがら烏もさわげ星祭」

「七夕や犬も見あぐる天の川」

子規を取り巻く七夕の行事の雰囲気が感ぜられる句である。

「七夕や願いをかけしかつての日」

「流れゆく願いをのせて笹飾り」　　敬鬼

「七夕や織姫彦星また一年」

「七夕や私の彦星いずこにか」　　加代女

さるすべり

さるすべりの花が咲き出した。この花はひと夏中咲いていて、夾竹桃と同様に夏を彩ってくれる。さるすべりは百日紅と書くのが正しい。というのも紅色の鮮やかな花を多くつけるからだ。もっとも花には白色もある。この樹木はあまり大きくならないので庭木としても使われ、道路からも紅色の花がよく見え、夏の日差しにも良く映える。

「きらきらと照るや野寺の百日紅」

「又しても百日紅の暑さ哉」

２つとも子規の俳句。紅色の百日紅が夏の陽の照りをうけて輝く様を詠んでいる。子規がたくさんの百日紅の俳句を詠んだのは夏にふさわしい強い花と感じていたからだろうか、

「さるすべり夏の終りのはげしさに」

夏の終わりがきてもなお暑い日々が続くが、百日紅も疲れをみせずに見事に咲いていると草田男は詠む。

「夕日浴び散水に映え百日紅」　敬鬼

梅雨明け

梅雨があけた。梅雨明け十日のごとく、炎天が続き、人も犬も野菜も昆虫も暑熱に耐えねばならない。でもこれが命を育て輝かせ、秋に恵みの収穫を得る。近頃は梅雨の終わりには集中豪雨が頻繁に各地で起き、年々異常となる。

温暖化は英語ではglobal warmingといい、主に地球の平均気温と二酸化炭素の上昇をいう。２００５年までの１００年間で０．７４度上昇しているという。わずかな温度上昇に考えられるが、これは平均であり、異常気象をもたらす。海水面（海面水位）やその温度が上昇し、台風が異常に発達して災害をもたらす。

「七月のつめたきスウプ澄み透り」

「七月や既にたのしき草の丈」

両俳句とも日野草城の作である。文字通り、暑いので冷たいスープが腹に澄み透るようだと詠み、また草の丈が身の程を越えるようになるのを命の成長とみて頼もしいと詠む。

「梅雨明けやノースリーブの肩眩し」　敬鬼

「梅雨明けや干しもの白くひるがえり」　加代女

暑さ

猛暑日には熱中症に罹る老人やこどもが多くなり、死者もでている。小学校１年生が校外学習で熱中症に罹り、死亡するといういたましいニュースも流れた。人災といっても良いだろう。地球規模のことなのですぐには改善できない。減災を心がけるしかないようだ。

「百姓の生きてはたらく暑さかな」

蕪村の俳句。江戸時代にも耐えられない暑さがあったようで、それでも田んぼで働かなければならないと詠じる。

「あら壁に西日のほてるあつさかな」

子規の俳句。夏の西日はすでに大気も暑いので耐えられないもの。それを素直に身体が火照るようだと表現。

「子どもらも影に寄りそう暑さかな」

「グランドもシーンと静まる暑さかな」　敬鬼

「木々の葉も垂れてこらえる暑さかな」　加代女

蝉しぐれ

この辺も最近はクマゼミが多い。クマゼミは大型のセミで体長は６センチから１０センチほどもある。樹木の上の方はクマゼミ、下の方はアブラゼミと棲み分けているようだ。子ども達が捕虫網でつかまえられるのはアブラゼミばかり。鳴く時間帯も午前中はクマゼミ、午後から夕方はアブラゼミとこれも棲み分けているらしい。ヒグラシは、木立に恵まれたところでカナカナカナと風情ある様に鳴くが、クマゼミはただ騒がしいだけで暑さを倍加させる。

「けふの日も事なかりけり蝉暑し」

種田山頭火は、何も起こらない日常のなか、ただセミだけが元気に鳴いていて、感じるのは夏の暑さだけと詠む。共感できる。

「顔近く蝉とび立てり母恋し」

セミをとって遊ぶのはこどもの頃、歳をとってもセミが飛び立つのを見ると母のことがついつい恋しく思い出されて切ないという。西東三鬼の俳句。

「蝉しぐれ枕にしつつ午睡かな」　敬鬼

「昼茹だり命削るか蝉しぐれ」　　加代女

夏蝶

蝶が暑さにもめげずに庭の夏野菜に舞い来る。日本の蝶は２６３種もいるという。アゲハ、クロアゲハ、キアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、シジミチョウなどは子どもの時からよく知られている。

なんと言ってもその生態の特徴は卵－幼虫－蛹－成虫という完全変態をおこなうことで、幼虫もアオムシ、イモムシ、ケムシなどと呼ばれるおなじみのものである。

「夏の蝶日かげ日なたと飛びにけり」

虚子の俳句。蝶々は暑さを感じないのだろうか。夏日の中、蝶は飛び回ることしきり。

「夏蝶の高揚りせり次の恋へ」

中村草田男の俳句。蝶は意外とこの時とばかり高く舞い上がる。蝶の飛びは相手を探すようにみえ、出会うと嬉々として連れ舞う。

「夏蝶やタモ持ち追うかつての日」　敬鬼

「夏蝶や命の賛歌舞い踊る」　　加代女

アブラゼミ

ジージーと夏の暑さを倍増するアブラゼミが、７月２０日を過ぎる頃から家の前の小公園で鳴き始め、８月一杯は続くのが毎年である。それに加えて、最近ではクマゼミが進出しシャシャと負けじと鳴き立てる。クマゼミの方が大きいので樹木の上方を占拠し、アブラゼミは下方に追いやられている。クマゼミは捕まえられないが、アブラゼミは容易に手でも手の届く所で鳴いたり休んだりしているので捕まえることができる。夕方、散歩の途中でアブラゼミを探し見かけたらそっと近づいて捕まえた。もっとも、すぐに放してやった。童心に返るひとときだ。

「夕焼の中執心す油蝉」

「夕立のあと冷じや油蝉」

山口誓子の２句。虚子に師事、水原秋桜子・阿波野青畝・高野素十らとともに俳句の近代化に貢献したとされる。夕立のあとひときわ激しく油蝉がなくものだ。

「アブラゼミ十日の命響かせり」

「雨上がり蝉時雨はや再開す」　敬鬼

「真っ昼間命をけずる蝉時雨」　加代女

ひまわり

夏の花は、なんといってもひまわりだ。あの黄色の大輪には、夏の力の強さが満ちている。英語ではサンフラワー、北米原産のキク科の一年草で、日本には１７世紀に伝来した。

「向日葵がすきで狂ひて死にし画家」

虚子の句。ここでの画家は、ひまわりを描いて有名なゴッホである。

「向日葵も油ぎりけり午後一時」

芥川龍之介の句。炎天下に咲くひまわりはエネルギーに満ち脂ぎっているが、それでも午後１時までで油切りになりうなだれる。

「ひまわりや太陽食べて強くなり」

「ひまわりの大輪の花睥睨す」　敬鬼

「お日様を追いかけ挑むひまわりかな」

「ひまわりを見上げ笑顔の孫二人」　加代女

ハイビスカス

大きな鉢に植えたハイビスカスがわが家にあり、真っ赤な花を毎日つけるので夏の早朝に見るのが楽しみだ。朝に大きくラッパ状に咲き夕方に萎む。この花はハワイの国花だが、南国をイメージできる鮮やかな鮮紅色をもち、街路のいたる所で豪奢に咲いているのを見た。

わが家にあるハイビスカスは観賞用に作られた種類で、仏桑華と呼ばれ、アオイ科フヨウ属の低木である。中国南部原産の説やインド洋諸島で発生した雑種植物であるといわれるが、不明であるらしい。慶長年間（１７世紀初頭）に薩摩藩主が徳川家康に献じたのがわが国への最初の渡来のようだ。

１２月の初めから2月末まで霜に当たらないように屋内に取り込んで育てる。

「南国の旅に誘うかハイビスカス」
「ハイビスカス元気と熱気ほとばしる」
「ハイビスカス踊りの精の宿る花」　　敬鬼
「陽を受けて庭を南国ハイビスカス」

「髪に挿し踊ってみたしハイビスカス」　加代女

トマト

夏の家庭菜園の代表である。わが家の菜園にも胡瓜とトマトの栽培は欠かせない夏野菜だ。日本には江戸時代の１７世紀中頃（寛文年間）長崎へ伝わたったが、ただ青臭く真っ赤な色が食べ物としては受け入れられず、観賞用で「唐柿」と呼ばれていたという。今では、家庭菜園では大玉トマトやミニトマトは完熟で取り入れでき、スーパーで購入するものに較べて新鮮で美味しい。

「もいでもたべても茄子がトマトがなんぼでも」

「トマトを掌にみほとけのまへにちちははのまへに」

両句とも山頭火の俳句。トマトは放浪の俳人に夏が与える贈り物で、御仏にも父母にも供えたいと詠む。

「井戸水の冷たさしみるトマトかな」

「赤く熟れ口に甘露トマトかな」

「帰宅して喉の渇きにトマトかな」　敬鬼

「ただいまも言わずにトマトかじりつき」

「遊びやめ汗をぬぐいつトマトかな」　　加代女

胡瓜

家庭菜園の栽培の主役のひとつで、よく育つし、とりたては新鮮でおいしい。連作が利かないので接木の苗を使う。４月下旬にポット苗を移植すると７月中旬には収穫できる。しかも採れはじめればいくつもいくつも採れるし、採り外れると一晩で大きく成長する。この時期の朝食にはきゅうりの浅漬けが欠かせない。

「生き得たる四十九年や胡瓜咲く」

草城の句。きゅうりは黄色く可憐な花を咲かせるので、今年もその花に接して自分の病を抱えて生きてきた４９年の生に感慨をもよおして詠んだ。

「熟れすぎし胡瓜美しもあまた垂る」

蛇笏の句。胡瓜は夏を迎えてたくさんの実を付けて垂れる。ほとんどが水分なのだが、パリパリと歯ごたえが良くさっぱりと美味しい。

「ぱりぱりと胡瓜浅漬け朝餉かな」

「窓越しの朝取り胡瓜水みずし」　　敬鬼

「胡瓜もぎ冷やしてかじりほくそ笑む」　　加代女

氷水

自転車通学の高校時代、夏、帰宅途中、氷水の旗の立てられた店先で食するのが楽しみだった。けっこう距離があるので喉が渇き、イチゴ、抹茶、あるいは金時をひとつ選んで汗をふきふき通学の友と啜ったものだ。

氷水は平安時代まで遡れる。清少納言の『枕草子』「あてなるもの」の段に氷を刃物で削った氷に甘葛をかけて食したとある。

「冷風の口にたまるや氷水」

子規の句。氷水を口の含んだときの感覚を冷風と表した。

「はらわたのひしとつめたし氷水」

「冷えわたる五臓六腑や氷水」

草城の2句。氷水を歯で噛み呑み込んだ時の痛いような感覚を詠む。

「氷水シャキシャキと歯にしみる」

「友垣の思い出の味氷水」　　敬鬼

「氷水ほうばり語る親子かな」　　加代女

花火

子どもたちが学童の頃、夏の夕餉のあとのお楽しみは、隣家の子どもたちとの花火であった。手持ち花火、ねずみ花火、ドラゴンとよばれた噴水花火、そしておしまいは線香花火であった。子どもたちは毎日のように花火に興じたことを思い出す。

小学校の高学年で黒色火薬を作った。木炭と硫黄、硝石を混ぜてこよりに巻き花火とした。点火したら花火としてぱちぱちと火が出たので面白かった。

次の３句は子規の句。

「二三人花火線香に端居哉」

「夕涼み花火線香の匂ひ哉」

「人の身は咲てすく散る花火哉」

夏の夜、縁先での線香花火の匂いと火玉からの閃光、いっとき閃光を出しすぐ燃え尽きる、あたかも人の身のようにと詠む。

「火の玉を落とさぬ子らの花火かな」　　敬鬼

「花火の火ほのかに浮かぶ子らの顔」

「一瞬の炎のアートの花火かな」　　加代女

夏祭り

いま住んでいる団地の自治会の主催で８月の第１土曜日に夏祭りが催される。お子さん連れでたくさんの人々が寄せ、自治会が用意した夜店で飲み食いして楽しむのが恒例だ。生ビールも用意されているので散歩の帰りに飲み、一息入れる。日が暮れて宵闇がせまると、広場の中央に設けられた櫓から太鼓が鳴り、盆踊りがはじまる。女の子は浴衣をきて近所のおばさんたちの列に加わって、「ほんにセトセトよいところ

瀬戸は火の街　土の街」の音頭にのり輪を描いて踊る。

「帯へ袂へ指入れてみて祭の子」

草田男の句。浴衣が着慣れないので、帯や袂に指を入れる子どもたちのしぐさを描写している。

「夏祭り母と娘の踊りの手」

「踊ろうと故郷の友夏祭り」

「踊りの輪はねてさびしき夏祭り」　　敬鬼

「幼子も浴衣にうちわ夏祭り」
「呼び込みの声に誘われ夏祭り」　　加代女

日傘

最近の真夏の暑さは３５度を超える。陽射しも強く、女ばかりでなく男も日傘を差すことが勧められる。女性の場合は、雨傘やこうもりをさすというわけにはいかず、日傘を使う。ワンピースを着て帽子を被り、日傘をくるくると回しながら歩く女性を見ると、これはなんとも風情がある。日傘は紫外線をカットし、直射日光を遮るので涼しくなり、おしゃれでもある。

「夕立に日傘さしたる女かな」
「清水の阪のぼり行く日傘かな」

この２句は子規の句。一句目は、突然夕立にもっていた日傘をさして雨を避けたという一場の光景を、二句目は京都清水をゆく日傘の女性、これもありふれた一場を詠む。

「としごろの膝をかくさず砂日傘」

草城の句。砂日傘は砂浜でたつパラソルで、そこで憩う女性は膝を崩してくつろぐという非日常の一場面を詠む。

「陽の中に影つくり行く日傘かな」
「下駄素足日傘をさして通り行く」　敬鬼
「くるくると日傘回して立ち話」　加代女

冷麦

蒸し蒸しするときの昼には冷や麦が食べたくなる。喉を越すときの冷たさは快感だし、食欲も進む。冷やしたつゆにねぎ、茗荷、大葉の薬味を加えて啜ると、暑気払いとなる。とくに、午前中、テニスに興じた後では、パンなどには代えがたい。冷や素麺あるいは冷やうどんでもおいしいが、冷や麦の方が麺の太さが喉越しにはちょうどよい。

「冷麦の通るのんどよ母に逢ひ」

長谷川かな女の句。かな女は高浜虚子の女性俳人育成のために始めた婦人俳句会に参加して俳句を詠んだ。「杉田久女・竹下しづ女と並んで大正期時代の代表的な女流俳人。喉越しの冷麦の感覚から母を連想した。

「冷麦やかしこまりたる膝のまへ」

万太郎の句。正座して冷麦をこれから頂けるとかしこまっている。

「冷や麦や幼き孫の喉ぼとけ」
「冷や麦やちゃぶたい囲み懐かしき」　敬鬼
「冷や麦をフォークですくう子どもかな」　加代女

カブトムシ

木曽路への帰り道、道の駅でカブトムシのつがいを買った。孫が遊びに来たときに喜ぶだろうと考えた。カブトムシ飼育用のケージのなかに、木のチップを敷き木片と餌皿を入れて、うまくいったら卵を産ませて幼虫にし一年間飼育し成虫に育てられたらと試みた。しかし、オスが産卵後メスを食い殺し、卵も見つけられなかったので失敗に終わった。このオスのカブトムシは冬に入る前に死んで、黒々とした殻を残し、いま書斎にある。

「兜虫ふみつぶされてうごきけり」

蛇笏の句。この虫は踏まれてすぐには死ななくて強いと感心した。

「甲虫縛され忘れられてあり」

三鬼の句。繋がれてしかも忘れられているのに生きている。強いと感心。

「鎧着た騎士の装いカブトムシ」

「カブトムシビートルズワンスモア」　敬鬼
「角立てて雌を争うカブトムシ」
「われこそは虫の王だとカブトムシ」　加代女

プール

市民公園に市民プールがあり、学校が夏休みの間営業する。子どもたちは小学校の頃にはこのプールに毎日のように通った。土曜日や日曜日には子どもについていって泳ぎを教えたり自分で泳いだりした。プールの近くにソーセージ、焼きそばやわらび餅を食べさせたり、売ったりする屋台が出ていて、ここで買い食いするのも子どもの楽しみのひとつだった。あれから４０有余年たつのに、夏休みには同じように遊んで、買い食いをしている子どもたちでいっぱいである。

「河童然もぐって浮かぶプールかな」
「プール終え焼きそばねだる二人の子」
「歓声で声も聞こえぬプールかな」　敬鬼
「あちこちで息とめバタ足プールかな」
「子どもらのはじける笑いプールかな」　加代女

お盆の墓参り

お盆の墓参りと兄弟一同の恒例となった会食のため長野市に一泊二日の旅行を夫婦、娘も一緒に旅した。ちょうどお花市の日で墓参にもっていくお花を売るテントが歩行者天国にたくさん出ていて賑わっていた。このあと、門前町を善光寺まで辿り、暗くなった本堂で手を合わせた。

翌日、戸隠は柵地区の大昌寺にある両親の墓を1年ぶりに詣でた。夜、一雨あったとかで墓石に汚れが目立ったので水をかけ清めた。ご苦労さんといわれたような気がした。

「しぐれしたしうお墓を洗つていつた」

種田山頭火の句で、時雨のあと自ら墓を洗ったという。

「ひるを臥て展墓のゆめや秋の風」

蛇笏の句。昼寝をしていたら墓参りをする夢を見た。風はさわやかでもう秋だと告げる。

「無沙汰詫び声かけながら墓洗う」　敬鬼

「よく来たね爺の声する墓参り」　加代女

空蝉

蝉は最後に脱皮し成虫となり、抜け殻を残す。蝉自身が死んだ後も抜け殻は遺るので、はかないものの象徴として扱われる。

辞書によると、別の意味もある。この世に現に生きている人、あるいは転じて、この世のことをいう。この意味では、万葉集にも

「いにしへもしかにあれこそうつせみも妻を争ふらしき」という歌があるという。

でも今は、はかないもののとして蝉の抜け殻を詠んだ俳句は多い。

「手に置けば空蝉風にとびにけり」

虚子の俳句。蝉の抜け殻は硬いけれども誠に軽いので風にのって飛んで言ってしまう。多分、持ち主にところに帰って行ったのだと詠む。

「女の手に空蝉くだけゆきにけり」

西東三鬼。この世に残されたただひとつの証だったのにという感慨か。

「空蝉や時の移ろい語るよう」　敬鬼

「空蝉や主なく足を踏ん張るか」　加代女

帚木

月川温泉は花桃の里としてよく知られた所で伊那地方飯田市の南に位置する阿智村にある。美濃国の坂本駅（現・中津川市）から神坂峠を越え伊那谷に至る古道東山道に位置し、この古道は奈良・平安時代近江の国から陸奥国まで続いていた。園原は源氏物語の第二帖「帚木」として登場するが、ここにあったハハキギがモデルになっている。 この伝説上の木は箒を立てた形の大木であったが、台風で幹が折れて今はないという。

「帚木の心を知らで園原の道にあやなく惑ひぬるかな」

これは源氏物語のなかの光源氏が幸薄い空蝉と一夜をともにした後に詠んだ句で、近寄れば消えるという帚木に近づいたばかり園原へ行く道にむなしく迷っていますと詠む。これに対して、

「数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木」

相手の空蝉は、しがない境遇に生きている私は近寄れば消えるという帚木のように消えていきますと哀切に詠んでいる。

「今は消え帚木思う古道かな」　敬鬼

夏終わる

台風も四国から中国地方に来襲し、その余波で強い風がここ東海地方も一晩さらされ、日中の気温は３２度前後でこれまでに較べれば過ごしやすい。

そろそろ夏の終わりに近づいていると実感する。盛夏時は暑さに辟易するが、それなりに活気が感じられる。しかしそれが峠を越し秋に近づくとほっとするもののなにかわ寂しい。人生と同じで盛りを越したことを類推するからだろう。

「塔高く空の不安に夏去ぬる」

飯田蛇笏は、見慣れている塔が碧い空に映え高く見える。どこまでも高き空に今年の夏も過ぎ去った感じ、その時間の経過に不安をもつと詠む。

「夏行けり西湖に白き鱒の腹」

渡邊白泉の句。富士五湖のひとつ西湖のマスが白い腹をみせて反転して泳ぎ去った。マスの動きに今年の夏も終わり秋が来ている。

「夏終わり陽射し和らぎ雲遠し」

「生気衰えもの寂しげに夏終わる」　敬鬼

「夕方の一陣の風や夏終わる」　加代女

秋

赤とんぼ

赤とんぼが飛ぶ季節となった。昔のように群れをなしては飛ばないが、それでもよく見かけるし、垣根の先に羽を休めているので、その羽を掴んで捕まえようとすると逃げられる。今住んでいるところで鬼ヤンマは見かけないが、水辺には塩からとんぼがいて、嬉しくなる。

「染めあへぬ尾のゆかしさよ赤蜻蛉」

蕪村の句。赤とんぼはなんといっても尻尾の茜色に目が行き嬉しくなる。

「挙げる杖の先ついと来る赤蜻蛉」

虚子は、持っている杖を試みに挙げたら、その先に留まったという。このとんぼにはそんな行動特性がある。

「いつも一人で赤とんぼ」

山頭火句。赤とんぼは私と同じだと詠む。

「網で追う赤蜻蛉の尾懐かしき」

「赤とんぼ抱っこの孫にとまりけり」　敬鬼

「赤とんぼ映る影さえあかね色」　加代女

こおろぎ

陽が暮れ始めるとこおろぎがチリリンチリリンと蝉にかわって鳴き始める。今年も秋がきたなといくぶん物寂しく感じる時だ。散歩していると茂みのあちこちで姿は見えないがこの虫のソロが楽しみになる。

「こほろぎの佛壇の中に鳴出しぬ」　正岡子規

「こほろぎや犬を埋めし庭の隅」

子規の句２つ。こおろぎの鳴き音が仏壇や犬の埋めたところから死を連想させるようだ。秋の夜、静まったところで鳴く音は慰霊の鈴とも聞こえる。

「こほろぎが密々鳴きて眠れざる」

草城の句。こおろぎの鳴き音が慰霊の鈴の音に聞こえるのだろう。

「こほろぎに鳴かれてばかり」

山頭火の句。こおろぎにお前も泣けと誘われた。

「こおろぎの鳴き音涼やか寝入る孫」

「こおろぎや夜を深める鳴き音かな」　敬鬼

「こおろぎの鳴き音聞きつつもの思う」　加代女

秋刀魚

秋刀魚は幾分酸味のかかった濃厚な脂身の味とその刀のような流線型の形に特徴がある。かつては庭でコンロを持ち出し焼いたものだった。さんまを秋刀魚と表すようになったのは大正時代のことで、詩人佐藤春夫が「秋刀魚の歌」を発表してからのことという。

「隣人のこめかみ憂しや秋刀魚食ふ」

石田波郷の俳句。秋刀魚を食うと、かつてのあるいは今の憂きことを思い出されるのであろうか、それが隣人のこめかみに見えるという。

「さんま大漁その一ぴきの焼かれけり」

久保田万太郎の俳句。回遊していた大群の1匹が焼かれ、いま俺が喰おうとしているが、何の因果だろうか。

「北洋の秋刀魚無念や焼かれけり」

「店頭に切っ先並べる秋刀魚かな」　敬鬼

「老い二人憂きこと隠し秋刀魚かな」　加代女

大根

大根の種は一粒が1ミリ程度と小さく、こんな小さな種からあんな大きな青首大根ができるのかと不思議で、種の秘めた大いなる力を感じる。大根は紀元前２２００年頃には古代エジプトで栽培され食されたという記録があり、日本では弥生時代には伝わっていて平安時代中期には園菜類として於保禰（おほね）として記録されているという。根の長さ、太さ、形状も多様で、皮の色も白が普通だが、それ以外に赤、緑、紫、黄、黒などの種類がある。

「あんたが来てくれる大根もふとうなつてゐる」

「のびあがりのびあがり大根大根」

「こゝろあらためて霜の大根をぬく」

３つの俳句は自由律俳人種田山頭火の落穂集にある俳句でいずれも大根を詠んでいる。1句目では大根も太く成長する頃にはきっと知人が再訪してくれると待ち望む気持ちを、2句目では並んだ大根が競うように土から背丈を伸ばす様子を、そして3句目では成長した大根をぬくのはその命を抜くようですまないと詠む。

「大根の種ひと粒に力秘め」　敬鬼

お盆

郷里には善光寺がある。お盆に合わせて帰郷すると必ず善光寺詣でをした。子どもが小学校にいる頃には夕方の散歩は境内で、ハトに豆を食べさせるのを子どもたちは喜んだ。豆を食べさせていると、善光寺に詣でた人や観光客もよってきて、皆でハトと遊んだものだった。

「盂蘭盆や無縁の墓に鳴く蛙」

子規の句。墓参りをしたとき無縁の墓にカエルが鳴いていた。きっと誰も来ないので代わりにお参りしているようだ。

「盂蘭盆や槐樹の月の幽きより」

蛇笏の句。白い花をつけたお盆の頃のエンジュは月の光を受けて青白く輝き幽玄だ。

「故郷のお焼き懐かしお盆かな」

「懐かしき人の輪の中盆踊り」

「間断なく懐古談出るお盆かな」　敬鬼

「盂蘭盆会茶飲み偲ぶ家族かな」
「亡き父母の思い出話盂蘭盆会」　　加代女

十五夜

天気は不安定だが、秋分の日を控えて晴れ間が多い。秋の花である彼岸花があちこちの土手で咲いている。

九月の満月を中秋の名月とよぶ。大気が澄み、満月が美しく見え、月見をするにも適した気候からとくに名づけられた。すすきを飾り、お団子を供えて月を愛でる。すすきは神の宿る依り代として、また稲穂の代わりという意味もあるそうだ。

「身を屈する礼いくたびも十五夜に」
「十五夜に手足ただしく眠らんと」

両句とも西東三鬼。神々しいばかりの十五夜の月を目にして、ただ身を正して礼をするか、あるいは手足を伸ばして眠るばかりと吟じた。

「十五夜や差しつ差されて老い二人」

「十五夜や夜のしじまに煌々と」　敬鬼

「十五夜や神秘語らう二人かな」　加代女

女郎花（おみなえし）

高さ一メートルほどの、細い茎の上部には粒粒の黄色い小花をたくさんつける。山上憶良に詠まれた秋の七草の一つで古来秋を代表する花として愛でられてきた。

女郎花の名前の由来ははっきりしないが、一説として、へしは飯であり花が粟粒に見えるので女の飯を思わせるので、「おみなめし」とも言われる。オトコエシ（男郎花）もあり、オミナエシより大きく、９月頃白い花をつける。

「見るに我も折れるばかりぞ女郎花」

芭蕉の句で、見たまま、その柔らかくかぼそい花に自分も引き込まれて折れそうだと詠む。

「吹かるゝや薄の中の女郎花」

「女郎花昔の人のすがた也」

両句とも子規の句集「女郎花」におさめられたもの。おみなえしは楚々とした女を連想させ、その風情を惜しむかのようだ。

「女郎花そこはかとなく人偲ばる」　敬鬼

すすき

散歩道の傍ら茂みの中にすすきの株があり、風にすすきの穂が揺れているのをみると、秋が深まったと感じる。すすきは尾花とも呼ばれ秋の七草の一つだし、茅（萱）と呼ばれ屋根に葺かれる。これは多年草なので毎年同じ所で大きくなり穂を付ける。大正時代に「俺は河原の枯れすすき・・・」などと演歌「船頭小唄」で歌われたが、いまはそんな風に感じる人は少なくなった。

「刈草に尾花あはれや月の秋」

蛇笏の句。すすきは月夜とよく合う。そして哀れや幽玄を感じさせる。

「あきかぜの地にみつるとは芒かな」

「わすれめや芒月夜のうしろかげ」

久保田万太郎の句。１句目ではすすきの原に吹く風から秋が満ちていると、２句目では月に照らされたすすきの影に潜むものを詠んでいる。

「すすきには団子と月がよく似合う」

「枯れすすき一世風靡の演歌かな」　敬鬼

秋の運動会

住んでいる団地の小学校の運動会が土曜日に行われた。生徒ほとんどの家族、爺ちゃん婆ちゃんが応援に行くので賑やかになるし、校庭に家族用の小テントを張って応援の合間に憩うのでまるでテント村となる。運動会の出し物は、綱引き、玉転がし、徒歩競争など見ていてもわくわくして、懸命に走る児童を身内ではなくても自然と応援する。

私が児童だった時にも、洋品店を経営し多忙な父親が来て、綱引きに参加した写真が残っていて、懐かしい。

「運動会の旗あちこちす春の山」

子規の俳句。運動会の賑わいを詠む。

「孫とはこれか総身「小さき運動会」」

草田男の句。幼い孫の懸命な運動を讃える。

「綱引きや子どもの顔に懸命さ」

「声からし弁当広げる運動会」　敬鬼

「運動会子らより親の声高く」　加代女

金木犀

１０月に入ると家の庭にある金木犀が一斉に花開き、香しい匂いを放つ。けっこう大きな木なので広い範囲に芳香が届く。この時期に二階の窓を開け放ち、香りをかぐ。そういえば勤務する大学キャンパスにも大きな金木犀があり、講義棟の窓から風にのって匂っていた。

「木犀に人を思ひて徘徊す」

尾崎放哉の句。金木犀の香しき匂いは若人をたきつけるようだ。

「木犀の匂かくれぬ日和かな」

「木犀の香のしづかなる夜寒かな」

草城の２句。金木犀の芳香は、昼日中そして夜でもその匂いに感づかせる。

「夕闇に香りいずこか金木犀」

「黄昏にふと足留める金木犀」　敬鬼

「ここかしこ足を留めさす金木犀」　加代女

台風

夏から秋にかけて台風が日本に襲来するが、年々もたらす被害は人的、物的に甚大となっている。地球規模で温暖化が進み、太平洋の海水温が上昇しているためと考えられる。洪水、崖崩れはもとより、電気。ガス、水道に多大な損害をもたらす。日本ではかつては野分けと呼ばれ恐れられていた。

「秋暑し颱風がぢりぢりと寄る」

「颱風が擲つ瓦数知れず」

「颱風が日本列島の尾を掴む」

「颱風に仰臥の四肢をこわばらす」

日野草城の俳句。いずれも台風が列島に接近するときの不気味さ、実際の被害、それに台風が来ていると時の身の強ばりを詠む。

「夜の闇おどろおどろの野分けかな」

「台風で風避けすみかにカラスかな」　敬鬼

「台風の風音怯える子犬かな」　加代女

柿

散歩して目につく秋の果物は柿である。家の庭あるいは、ちょっとした林の中の柿の木は、夏は緑の小さい実が１０月中旬ころになると、まさに柿色に色づき、秋来ぬと実感する。柿は１６世紀頃にポルトガル人によってヨーロッパにそしてアメリカ大陸に広まったという。

子規は柿が大好物だった。「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」の句はつとに有名だが、これ以外にも柿を詠んだ句が多い。

「初なりの柿を仏にそなへけり」

「三千の俳句を閲し柿二つ」

次の句も虚子の詠んだもの。やはり柿が好物だったようだ。

「去来抄柿を喰ひつゝ読む夜かな」

次は山頭火の句。柿は葉っぱも色づくとまことに良い。

「しぐれて柿の葉のいよいようつくしく」

「柿一つもいでおあがりお婆かな」　敬鬼

「すずなりに夕日に映えて照柿かな」　加代女

秋深し

１１月も半ばになると、道の端の雑草も枯れ、街路樹のプラタナスも枝が刈られて坊主になり、秋が深まったと感じる。このような風景は枯淡の絵のようで、一抹の侘しさ、心細さや淋しさがある。命のエネルギーが表面上縮小するのを見るからだろう。

「秋深き隣は何をする人ぞ」

芭蕉のよく知られた一句。大坂で旅に病む芭蕉が病床で詠んだ句で、私は病で動けないが皆は何をしているのかと問うた句と言われる。

「彼一語我一語秋深みかも」

虚子の俳句。人の語るのも、それに答える自分の言葉も秋深いことを表す。

「深秋といふことのあり人も亦」

これも虚子の句。秋も深まったとあいさつされ自分もほんとにそうだと同感している。

「故郷の友に便りを秋深し」

「故郷やふた親偲び秋惜しむ」　　敬鬼

「秋深し子どもも家路急ぎけり」　加代女

秋祭り

郷里では、町内会ごとに神社があり、秋祭りが催され、獅子舞や神楽が引き廻され、屋台も出てそれは賑わい、子どもには楽しい夜だった。その夕食は母親手作りの稲荷寿司を兄弟みんなで食したものだった。

「一日の秋にぎやかに祭りかな」

子規の句。戦後まもなくの秋祭りは大人の御神輿、子ども神輿、そして獅子舞がでて賑やかなものだった。

「老人と子供と多し秋祭」

虚子の俳句。老人も多かったが、かつては子どもが多く夜店の金魚すくいや綿菓子に群がっていた。

「棒に集る雲の綿菓子秋祭」

三鬼の句。秋祭りと言えば綿菓子というイメージがある。

「ピーシャララ神楽に獅子舞秋祭り」

「秋祭り金魚すくいに息を詰め」

「秋祭り終えて家路に三々五々」　　敬鬼

落葉

秋の風情を代表するのは落葉である。散歩道にも楓の赤あるいは銀杏の黄色の落葉が行く手を覆うし、椎の実や団栗が交じり、思わず拾ってポケットに入れている。落葉するのは、葉に含まれる栄養素を幹に回す一種の老化過程で、このときに赤色になるアントシアニンや黄色になるカロチノイドが葉に合成される。

「それでよろしい落葉を掃く」

山頭火の句。葉を落とすは自然の摂理なのでよろしいと詠むのだろうか。

「ふりいでし雨ぬれそめし落葉かな」

万太郎の句。散る落ち葉が雨に濡れ、ひときわ秋の風情が増した。

「夕べ落葉たいて居る赤い舌出す」

尾崎放哉の句。かつては落ち葉を箒で集め焚き火をしたものだった。あちこちでみられたなつかしい風景だが、一酸化炭素を出すので禁じられた。

「かさかさと落葉ふみふみ俳句かな」

「次の芽に役目託して散る落葉」　　敬鬼

「かさこそと淋しさつのる落葉かな」　加代女

紅葉

庭の中央にある枝の張った野村紅葉が真っ赤に色づいた。しばらくは紅葉を自宅の窓越しに楽しめる。でも師走が近づくと少しの風ではらはらと散る。これも毎年のこととは言え、風情があり、秋到来を実感させる。もっとも落葉が多いので集めるのはひと苦労だ。

紅葉の俳句は芭蕉の時代から多くの人が詠んでいるので多い。

「たふとかる涙や染めて散る紅葉」

芭蕉の句。涙を流して散る紅葉を見ている。きっと尊い涙なのだろう。

「いろいろの紅葉の中の銀杏哉」

子規の句。紅い紅葉のなかでの黄色い銀杏はひときわ感興を湧かせる。

「かがやける白雲ありて照紅葉」

虚子の句。光を受けて照る紅葉は白雲の下いっそう輝いている。

「索道下一面真っ赤照る紅葉」

「もみじ散りあれこれしのぶ我ひとり」　敬鬼

「影さえも色とりどりの紅葉かな」　　加代女

松茸

秋の味覚といえば、松茸であるが、この頃は高い値段のために手に入らない。でも時々スーパーにもアメリカ産のものが出ていて、比較的安価で結構松茸の匂いが濃い。匂い松茸、味シメジの謂われの通り、松茸は匂いがいのちだ。

子規はたくさんの松茸を季語に俳句を詠んだ。次の３句はいずれも子規の詠んだ句。

「つれの者の松茸取りし妬み哉」

明治時代も松茸は貴重だったようだ。

「虚子を待つ松蕈鮓に酒二合」

松茸寿司をつくり虚子と一杯やるのを楽しみに待つ心境を吐露。

「行秋や松茸の笠そりかへる」

松茸は秋が深まると傘が開き、匂いも薄れ値打ちが下がる。

「貧厨に松茸を焼く香かな」

この句は草城のもので、貧しい台所にも松茸を焼く匂いがし、豪奢と感じ入る。

「松茸や山の恵みを掠めとり」
「松茸やお椀の中の珍味かな」　敬鬼

新酒

師走に入り、待ち望んだ新酒の季節が来た。古酒も風情ある。地元の地酒の明眸という銘柄が贔屓で妻共々愛飲している。純米酒でおとなしい味でくせがない。酒の肴にはこの時期に採れるヤリイカの煮物が味を引き立てる。

子規は新酒を季語にした俳句を多く詠み新酒という句集を編んだ。

「たまさかの君に新酒を參らせん」

「新酒かけて見ばや祇王の墓の上」

祇王は白拍子。平清盛の寵を受けるが、清盛が仏御前に心を移したため、隠棲したという故事に絡んだ句。新酒を墓にかけて菩提を弔う。

「ひしこを得て厨に捜る新酒哉」

寺田寅彦の2句。ひしこはカタクチイワシで、その干物。それを貰ったので新酒で一杯するために捜したという。

「鍋囲み新酒味わう古き知己」　敬鬼

「今年酒差しつ差されつ老夫婦」　加代女

秋の雲

秋の雲には、うろこ雲、さば雲、いわし雲など魚の名前がついたものが多いようだ。

真っ青な空に浮かぶこれら魚を連想させる雲は、高度５千から１万５千キロ程度にできる巻積雲と呼ばれる。秋を感興させる風物詩だ。

「眼下頭上只秋の空秋の雲」

子規の句。眼の上も下も秋の空、秋の雲で満ち満ちた良い日和。

「どこからともなく雲が出て来て秋の雲」

山頭火の句。秋の空を長く眺めていると雲がどこからか出てくる。これも今日は良い日和だ。

「秋の雲歳月はやくながれけり」

蛇笏の句。秋の雲の流れと同じように、来し方の歳月の流れも早く感じる。

「来し方を観想させる秋の雲」

「いわし雲空の大海泳ぎけり」
「秋の雲抽象絵の大家なり」　敬鬼
「夕空を西へ回遊秋の雲」　加代女

秋の風

秋の深まりは吹く風に一番に感じる。木枯らしほどは寒く強くなく、ただ冷むやりと肌にあたる。この風は、木の葉を散らすというよりは落ちる葉をひとつふたつ舞わす風情である。こんな風情が見る人を静かに落ち着かせる。

次の句は芭蕉の詠んだものである。

「身にしみて大根からし秋の風」
「あかあかと日は難なくも秋の風」
「物いへば唇寒し秋の風」

3句目は、口を開くと秋の冷たい風が唇に触れて寒々と感じることから、余計なことを言うなと戒める。

「身震いの木の葉揺らかす秋の風」
「秋の風身支度うながす首の筋」

「運ぶのか今年の名残秋の風」　敬鬼
「廻るめく今年の思い秋の風」　加代女

秋の暮れ

秋になると暮れるのが早くなる、というより急に早くなる感じだ。そう、まさに釣瓶落としのごとくだ。もっとも井戸を使うことが無いので釣瓶なんて今では知らない人が大半だ。言い換えれば秋の日はジェットコースタのごとし。

「あどけなく笑ふ顔さへ秋のくれ」
「うつくしう淋しき虹や秋のくれ」
「さびしさや一人にあまる秋のくれ」

子規が秋の暮によせた3句。いずれも秋の暮れは淋しいと詠む。

「たはむれに妻を背に負ふ秋の暮」

草城の句。戯れに妻を背負うことはないのに、それを行ったのはものを感じさせる秋だからという。

「二つ三つこうもり飛び交う秋の暮れ」

「立ち枯れの草茫茫と秋の暮れ」
「秋の暮れ後先になる影法師」　　敬鬼
「秋の暮れ影踏み踏み散歩かな」　　加代女

中学同窓会

１０月中旬、中学校同窓会が郷里の駅前のホテルのレストランで行われた。すでに卒業から６０年が過ぎたが、ひとクラスで十数人前後が集まり、１０年ぶりかで旧交を温めた。鬼籍に入った同窓生も何人かいたし大病を報告した者もいたが、ここに集合した男や女は健康の懸念をぼやきつつそれなりに元気のように見受けられた。皆が後期高齢者の仲間入りで今後、何回、何人集まれるかも心許ないためだろうか、気分が高ぶり、賑やかながらどこか淋しさを隠した集まりとなった。これまで無事に生きてこられたという安堵感とそれなりに頑張ってきたという少しの自負心、そしてこれからの先のわからない余生の不安とがないまぜになって、自分を含めて高揚したからであろう。

「鞦韆の月に散じぬ同窓会」

昭和５年に夭折した愛媛県出身の芝不器男の俳句。鞦韆（しゅうせん）とはぶらんこのことで、ぶらんこで遊んだ懐かしい友垣も、同窓会がはねると、それぞれ

に今の顔に戻っていく。その感慨を詠んだ句である。

「高ぶりてやがて淋しき同窓会」　敬鬼

鶴ヶ城

宇都宮にいる息子夫婦、孫二人と那須塩原温泉で落ち合い、ひと晩、温泉に入り夕食を一緒にして孫たちと遊んだ。

翌日、戊辰戦争１５０年というので会津若松を訪れ、鶴ヶ城を探訪した。ここは一ヶ月で女や子どもを含めて千三百名の戦死者をだした悲劇の城ということだった。大体のことは「八重の桜」というＮＨＫ大型時代劇で承知していたが、白虎隊を含め有為の若者が死んでいった悲劇が城内のパネルで説明してあった。それによると、鶴ヶ城は砲撃され、天守は穴だらけの無残な姿となり降伏し、明治六年に取り壊された。

現在の鶴ヶ城は5層の白亜の天守で昭和４０年に鉄筋コンクリートで築かれたが、外観は往時のままで、鶴のような美しい形をもつ城だった。

「明日の夜は何国の誰かながむらむなれし御城に残す月影」

これは、落城寸前の九月二十三日に陣中で詠んだ山本八重の和歌と伝えられている。

「菊の香や城落ち切なし鶴ヶ城」　敬鬼

野村もみじ

庭の真ん中の一本の野村もみじが見事に紅葉してきた。植木市の苗から育てたもので、高さ5メートルほどになり、左右に枝を広げているので見栄えがする。植えてからかれこれ４０年。枯れた樹木もあるなかで野村もみじは、金木犀や紫木蓮と一緒にわが家とともに歩んだ樹木といえる。春先は濃い紫の葉を付け、それが夏に向かうと黄緑になり、晩秋には赤く色づく。

「かがやける白雲ありて照紅葉」

虚子の句、陽を浴びた紅葉は照紅葉といわれ、空の白雲を背にまことに美しく見栄えする。

「こかくれて薄き夕日の紅葉哉」

子規の句。こかくれては木隠れての意味か。木の間越しに射す陽が鮮やかに

紅葉を浮きたたせているという。

「紅葉散りもの偲ばれる寺のうち」　敬鬼

「影さえも色を濃くする紅葉かな」　加代女

冬

時雨

晴れていても時折に曇天となり、風が吹くようになった。時雨だ。こんな時は一時、雨宿りをしてやり過ごし、散歩を続ける。秋の終わりから初冬にかけて多いようだ。季節の変わり目を強く意識させる。

種田山頭火が「時雨れる」、あるいは「しぐるる」を季語に詠んだ俳句。最初の句は山頭火の代表的な句である。時雨は時にうつうつとした気分にさせる。それを詠んでいる。

「うしろすがたのしぐれてゆくか」

「しぐるるやしぐるる山へ歩み入る」

「しぐるるや死なないでゐる」

「時雨遭い肩寄せ歩む老夫婦」

「ウォーキング時雨れていくか俺と犬」　敬鬼

「時雨来て犬に服着せ散歩かな」　加代女

お菜洗い

信州の家庭では、十一月末の頃、私が育った６０年前はお葉漬けをどの家庭でも樽にいっぱい漬けこむのが普通だった。お葉漬けというのは野沢菜漬けことである。手が凍るような冷たさの外の水道でお菜洗いを母親に頼まれて行っていたからだ。でも漬けて１カ月もする正月には、パリパリとして美味しい漬け物を味わうことができた。

野沢菜は、もともと、長野の野沢温泉村を中心として信越地方で栽培されてきた。大戦後は全国的に栽培されるようになった。北信州では「雪とコタツとお葉漬」に言い表されるように、雪が降る寒い日には炬燵を家族や知人が囲み、お葉漬をお茶菓子の代わりに何倍もほうじ茶を飲み語り合うのであった。

冬、スキーに行き、冷えた身体をお汁粉と野沢菜を食すると忘れられない味となったことを懐かしく思い出す。

「お菜洗い葉と茎太くみどり濃し」

「寒風に感覚なくすお菜洗い」　　敬鬼

山眠る

この言葉は、冬山は惨淡として睡るが如しから来ている。北宋の画家・郭熙の言葉だとか、または南宋の呂祖謙の『臥遊録』だとかされているようだがはっきりしない。そんなに高くはない冬山は、木々の葉も落ちてひっそりとする。その情景を眠ると表現した。因みに春は笑う、夏は滴る。秋は粧うと表される。

「山眠る如く机にもたれけり」

虚子の句。山は惨憺としてうら寂しく、自分も机にもたれて気が落ちるという。

「日あたりの海ほか～と山眠る」

尾崎紅葉の句。ほかほかと見える海と惨憺として眠る山を対比している。

「よく焼けしうなぎの肝や山眠る」

万太郎の句。これも焼けた鰻の肝と眠る山を対比している。

「春と秋いとなみ全う山眠る」　　敬鬼

「山眠り遠くいんいん寺の鐘」

「山眠り風の冷たさ耐え歩く」　　加代女

木枯らし

１１月に入り、強く寒い風の季節になった。木枯らしだ。北よりの風のことで、冬型の気圧配置になったことを示す。凩とも言い、いよいよ冬が到来したのだ。散歩に出るにも襟巻きと手袋と防寒コートがかかせない。

「けふは凩のはがき一枚」

山頭火の句。今年はじめての凩の到来を冬のはがきと詠む。

「今年も事なし凩に酒量るのみ」

これも山頭火の句。凩を聞きながら今年も無事に過ごしたと酒を飲む。

「凩のふけてゆく澄んでくる心」

これも山頭火。凩が吹きそれに耽ると自分の心も澄んでいく。

「木枯らしや行き交う人の背を叩き」

「木枯らしや身仕舞い急げと背中押し」

「木枯らしや木々ざわざわと姿見せ」　敬鬼

「木枯らしの音に怯えて泣く子犬」　加代女

枯葉舞う

夕方の散歩に出ると盛んに枯葉が舞う季節が到来した。これから1週間ほどで散り果ててしまう。寂寞を感じる時だ。イチョウ、サクラ、コナラ、ブナ、ハナミズキなど葉を落とし、冬の眠りを経て春に再生する。

「枯葉朽葉中に銀杏の落葉哉」

子規の句。枯れた色の中に銀杏の落ち葉の黄色に興じる。

「凩や枯葉の走る塔の屋根」

寅彦の句。高さがある塔の屋根に吹き上げられたり積もったりの落葉が風に飛ばされていくことだ。

「朴枯葉かさばりおちて流れけり」

蛇笏の句。朴の木の葉は大きいが、それらが群がり落ちて川面を流れていく。

「風吹いてシャンソンふうに枯れ葉舞う」

「枯葉舞う人の黄昏奏でるか」

「歩きつつ行き先示し枯葉舞う」　敬鬼

「幼子や舞う枯葉追う着ぶくれて」　加代女

寄せ鍋

寒い夕べの卓にはもうもうと湯気立てる寄せ鍋が身体も心も温める。誰からともなく鍋がいいなというので寄せ鍋になる。具にするのは牡蠣、鱈、鮭などの魚介類が多いが、時に鶏肉、豚肉、牛肉が入る。これらにネギ、シメジ、椎茸などのキノコ類、そして豆腐を添えるとそれぞれ味がしみて美味しい。もちろん、ビールや日本酒もかかせない。不思議と家族全員が饒舌になるので団欒となる。

「又例の寄鍋にてもいたすべし」

虚子の家庭でも寄せ鍋が良いなというと自然に寄せ鍋になるようだ。

「ほんに仲よく寄せ鍋をあたたかく」

山頭火の句。放浪の俳人には寄せ鍋は極上のおもてなしだった。

「寄せ鍋に談論風発とき忘れ」

「寄せ鍋や笑顔がかすむ湯の煙」

「寄せ鍋や瞼に浮かぶ父と母」　敬鬼

「寄せ鍋や湯気のむこうの笑顔かな」　加代女

夜寒

１１月も半ばを過ぎると寒くなり、とくに夜は冷え込む日もある。夜寒で布団の中に湯たんぽや電気アンカなどがほしくなる。布団の中がしだいに暖かくなり、それとともに本を読んでいても眠気が起きて寝入ることができる。極楽極楽といえよう。

子規は夜寒の句を多く詠む。次に3句を挙げる。

「夜を寒み俳書の山の中に坐す」

「さし向ふ夫婦の膳の夜寒哉」

「兄弟のざこね正しき夜寒哉」

いずれの句でも夜の寒さの光景をそのまま詠んでいる。

次は草城の1句。

「おしろいの香のあたゝかき夜寒かな」

寒いと人肌が恋しい。妻との同衾だろうか。

「遠吠えが静寂を破る夜寒かな」

「白玉の燗酒飲むべし夜寒かな」　　敬鬼

「茶を煎れて一服ほっと夜寒かな」　　加代女

蜜柑

冬の果物は、なんといっても炬燵の蜜柑に限る。食後、炬燵に入り暖まりながら蜜柑の皮をむきひとつずつ頬ばり雑談に興じるのは冬の楽しいひとときだ。団欒のアイテムとして落花生と蜜柑はかかせない。

「あからさまに蜜柑をちぎり且啖ふ」

西東三鬼の句。蜜柑を少し乱暴に皮を剥きむさぼるように喰う光景が浮かぶ。

「つれ～に剥いたる蜜柑あまかりき」

日野草城の句。手持ちぶさたをしていて手近にあった蜜柑を食べたら甘かった。

「をとめ今たべし蜜柑の香をまとひ」

これも草城の句。少女が蜜柑を食べ、その香りをまとっている。惹きつけられる。

「鈴なりの蜜柑照り映え夕間暮れ」

「皆で剥く味懐かしの蜜柑かな」　　敬鬼

「蜜柑持ち万歳歩き一歳児」　　加代女

山茶花

南の隣家との間の生け垣には山茶花が植えられている。早く咲く時には師走のなると紅い花を一面に咲かせ、ひと冬の間楽しむことができる。生け垣な両側面と上面を平らに刈られてあるので、いたる所に花があり、花の乏しい時期では華やかだ。

子規は山茶花を季語にいくつかの句がある。

「山茶花の垣根に人を尋ねけり」

「山茶花のこゝを書齋と定めたり」

「山茶花に犬の子眠る日和かな」

「山茶花を雀のこぼす日和哉」

この４句は冬日を浴びほっこりさせる山茶花の景観を詠んでいる。

「山茶花の花咲く小道ほっこりと」

「山茶花鄙びた家もあでやかに」　　敬鬼

「山茶花や垣根はさんで良い日和」

「山茶花の歌口ずさみ朝登校」　　加代女

朝霜

冬の朝、外気温が零度以下になると霜が降りる。窓から見える公園も霜が真っ白についている。この辺は雪がほとんど降らないので、霜に覆われたところは一服の景色だ。もっとも陽が射してくるとあっという間に消えるのも感興がある。

霜のある光景を「朝霜もゆる」、「下駄の霜あと」「百鬼夜行にあと」「赤かぶら」「竹の月」と興趣あるものとして子規は詠んだ。

「ほろほろと朝霜もゆる落葉哉」
「ぬぎすてた下駄に霜あり冬の月」
「故郷の霜の味見よ赤かぶら」
「朝霜や静かに残る竹の月」

子規には霜あるいは朝霜の句が多い。

「朝霜やひっそり露と消えにけり」
「目を覚まし身震いひとつ朝の霜」　　敬鬼
「有明の月に照らさる朝の霜」
「靴あとのくっきり残る朝の霜」　　加代女

葉ボタン

街路樹の根元に葉ボタンが植えられる季節がきた。花が少ないこの季節に鮮やかな葉は周囲を彩って楽しい。葉ボタンはキャベツが江戸時代に斑入りなど葉変わりから作られたと言われる。冬には眼福を与える観葉植物だ。

日野草城は、葉ボタンをよく観察していた。次の３句はいずれも葉ボタンの形や色合いそして風情を詠んでいる。

「葉牡丹のさまかはりつゝ寒くなる」

「葉牡丹やいとけなき葉は抱き合ふ」

「葉牡丹の露の一顆輝りひかり」

「葉ボタンや道行く人を微笑ます」　敬鬼

「葉ボタンや彩りふくふく眼が笑う」　加代女

「手を出して葉ボタン撫でる小さな手」

冬の空

冬、天気が崩れるとどんより重たい空となり、風も冷たく、気も陰うつとなる。散歩をしていても周りを見ることもなく、足を運ぶだけ。こんなとき、たとえばカラスが2羽3羽飛ぶのを見ると、カラスは寒くないのだろうか、こんなに寒いのにと思いやる。

「冬空に大樹の梢朽ちてなし」

虚子の句。どんよりした冬空に大きな木の梢も朽ちたのか見えない。寒々とした光景が浮かぶ。

「ウソはいはないあんたと冬空のした」

種田山頭火の句。厳しい冬空の下、とてもうそはいえないよと友に語るのか。

「冬の空カラスねぐらに急ぎけり」

「冬の空どんより重く蓋かぶせ」

「冬の空覆う灰色垂れ下がる」　敬鬼

「大気さえ肌に刺すよう冬の空」　加代女

初氷

１２月にはいると、北から寒気が流れてきて寒さがつのる日がある。朝、起きてみるとちょっとした水たまりには薄く氷が張っているのに気がつく。この辺は年に数えるほどしか氷が張らないので、そっと手で掬ってみると、厚さ数ミリ程度だがしっかりした手応えがある。でも、数時間もすれば跡形もなきように消えしまうのではかない。

「初氷何こぼしけん石の間」

与謝蕪村の句。踏み石の間にこぼした水に張られた氷を見つけて、今年はじめてだと感興している。

「うすうすとうつる朝日や初氷」

子規の句。もう氷が張る季節になった。朝日が薄い氷に映えていてきれいだ。

「初氷おそるおそるの犬の足」

「朝ぼらけきらりと光る初氷」

「有明や薄紙のごと初氷」　敬鬼

「初氷さわって指引く子どもかな」　加代女

風花

晴れた日にまれに雪が舞うときがある。風花だ。小雪が降るのかあるいはどこか近くの山で降った雪が風に飛ばされてきたのか。めったに雪が降らない当地では寒いけれども風情がある。

次の３句は虚子の吟詠である。

「日ねもすの風花淋しからざるや」

「風花はすべてのものを図案化す」

「風花の仕事始の薪を割る」

いずれも仄かな自然現象の風花に誘われ、すべてのものが風花の意匠を着せられデザインされて風情良くみえるという。

「風花や移り気に舞う窓の外」

「風花や晴れ間を埋める小道具か」　　敬鬼

「風花に子どもら舞いてはしゃぎけり」

「風花やこたつで眺め一句詠み」　　加代女

クリスマスとサンタクロース

サンタから子どもへのプレゼントを送る祭事として定着している。子どもの頃の思い出がある。クリスマスの朝起きてみたら枕辺にプレゼントがあり、開けたら本だった。「ああ無情」という子ども向けの「レミゼラブル」だった。読み出したら面白く一気に読んだ。これが今に続く本好きのはじめだった。

「クリスマスの鐘のひゞける月夜かな」

「クリスマスの靴磨きゐる牧師かな」

2句とも日野草城のもの。聖なる夜を連想させ、凍てついたなかでの厳粛な雰囲気が伝わる。

「クリスマス心はずますベルの音」

「イブの夜手伸ばし探る枕元」　　敬鬼

「サンタ来た絵本見つける男の子」

「クリスマス煙突立ててねだる子ら」　　加代女

南天の実

散策路のあちこちの南天がみられ、冬になると小さな多数の赤い実を付けるので目につく。難を転ずるの意味からめでたい木として家々の玄関にも植えられている。枝振りの良い木を切ってきて活け、飾ると結構さまになり、また長持ちする。

「南天の實をこぼしてや鳴く雀」

子規の句。冬、啄む実の少ない季節で南天の赤い実は雀を朝から惹きつけるが、うまく啄めないとチチチと啼く様を興趣と詠む。

「冬ざれや房々として実南天」

草城の句。草木が枯れ寂しい冬ざれに赤い実をふさふさとたくさん付けた南天はこの時期の風物。

「南天や床の間かたち正すかな」　敬鬼

「南天の赤い実はえる手桶かな」

「床の間に南天活けて福願う」

「南天の実ひとつ摘む小さな手」　加代女

年の暮れ

今年もあと二十日あまり、押し詰まってきた感がある。この時期のことを年の瀬という。瀬というのは川の急峻な流れをさす。何でも江戸時代は大晦日が掛け買いの精算日となっていたので、その金がないとそれこそ切羽詰まったということらしい。

「ともかくもあなたまかせの年の暮」

一茶の句。年の瀬を迎えていろいろやりたいことがあるのになに一つ手につかず、なるようになるとひらきなおったという心境だろうか。

「なりにけりなりにけりまで年の暮」

芭蕉も、意に沿わずものごとはなってしまった、なってしまうだろうと年の暮れを迎えて嘆息しているのだろうか。

「「悲喜あれとなにはともあれ年の暮れ」

「日めくりの薄さしみじみ年の暮れ」　　敬鬼

元旦

新しい年が明けた。めでたいと言えばめでたいし、冥土の旅の一里塚とすればめでたくはない。めでたくもあり、めでたくもなしだ。年賀状が届く。一年に一回やりとりする人が多くなったが、元気にしていることが伝わるし、また伝えることができるので嬉しい。謹賀新年のみと記すより近況を記してあれば一層嬉しさも増す。

「正月の子供に成て見たき哉」

一茶の俳句。正月を喜んでいるのは子どもばかりで、その様をかつてはそうだったなと年老いた大人はうらやましく見ている。

「目を明て見たれば春となりにけり」

子規は一夜明ければ新春がきていたと素直に吐露した。

「常のよう夜の白みて年かわる」

「目覚めれば新春の陽さしにけり」　敬鬼

「元旦や空欄で待つカレンダー」　加代女

雪景色

正月も十五日を過ぎると、寒波が北陸、関東、そして東北を襲った。ここ名古屋でも雪が5センチ降り積もった。夜明けに眼を醒まし窓の外を見やると、ほのかに明るい。屋根、公園など一面の雪景色になっていた。

気象解説によるとラニーニャ現象のせいだそうだ。ラニーニャ現象は、太平洋赤道地域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より低い状態が続く現象だそうで、エルニーニョ現象の反対の現象だという。

確かに、朝などの室温は、暖房を切ってあるせいか、１０度以下となり、外気温はしばしば零下2度くらいとなって氷が張ってある

「雪降るよ障子の穴を見てあれば」

子規は、しんしんと降る雪を障子の穴から飽きるとも無く見ていたのだ。

「雪の上に雪降ることのやはらかし」

雪は降り積もった雪の上に降り注ぐ。西東三鬼はこれをやわらかと表現した。

「朝の陽に淡い墨絵の雪景色」　敬鬼

「登校の足跡点々雪景色」　加代女

鏡餅

生まれた家は洋品を商う商店だったので正月１１日には鏡開きをしていた。こちこちになりひび割れた鏡餅を割ってお汁粉にし、家の者や子供、そして番頭さんなどで食し、神棚に商売繁盛を祈願するのである。当時は子供だったので餅割りと汁粉を食べたことはよく覚えていて懐かしい。

「橙の据りがよくて鏡餅」

虚子の句。二重に重ねた丸餅に飾りとして橙を据え奉書紙を敷いた三方台に載せ神棚に供えたものだった。黄色の橙が鏡餅をしき締めている。

「鏡餅暗きところに割れて坐す」

西東三鬼の句。正月飾りの鏡餅は１１日頃ともなると乾燥しひび割れ、場合によってはカビがはえて無残な姿をさらす。

「鏡餅割って福を戴けり」　敬鬼

「正月も終わり告げるか鏡開き」

どんと焼き

正月１５日が過ぎたので松飾りをはずしたが、いまはどんと焼きが行われていないし、庭でのたき火もできないので、どのように処分するか毎年困る。正月飾りは神事の道具でもあるので頭の痛いところだ。どんと焼きは、左義長とも言い、子どもの頃には神社や田んぼで1月１５日の夜普通に行われていた。その年の門松、松飾り、注連飾り、書き初めで書いた物を持ち寄って焼き、その火で餅を焼いたものだった。これは、門松などを焼くことによって歳神を送るという意味があるという。

「くろこげの餅見失ふどんどかな」

室生犀星の一句。火柱が数メートルにもあがるので、往々にして餅が黒焦げになりがっかりさせられる。

「どんど焼きどんどと雪の降りにけり 」

一茶の俳句、北信濃ではこの時期よく雪が降るが、こんな晩でも雪の中でどんと焼きは行われた。雨と異なり雪の中では燃え上がる火は幻想的でさえある。

「どんと焼き火照りのなかの寒さかな」　敬鬼

水仙

冬から春にかけて黄色い花を咲かせる。季語は冬になる。原産地は主にスペイン、ポルトガルを中心に地中海沿岸地域で、日本には中国から伝わった。可憐な花にしては、有毒植物であり、茎を中心に全体に毒がある。

「佛壇に水仙活けし冬至哉」

「水仙も處を得たり庭の隅」

子規の俳句。子規は水仙を季語としてたくさんの句を残した。可憐な水仙はどこにも咲いているが、それだけに俳句に詠みにくいが、 水仙が咲いている所を入れると情景がよくイメージできる。

「朝日浴びみずもに映えて水仙花」

「水仙や温かさ呼ぶラッパかな」　　敬鬼

「池端の黄色まぶしく水仙花」

「水仙や水面で揺れるナルシスト」　　加代女

月、木星、金星の一直線

１月３１日、珍しい天体現象が起きているのに目を見張った。それは東南の低い空に三日月、その上に明るい木星、そして少し離れて金星が輝いているではないか。あわててカメラのシャッターを押した。もちろん肉眼には大きく鮮やかでもカメラに取るとそれは小さな点にしか写らないが、それでもはっきりと見分けがつく。

この現象は、国立天文台の星空情報にも掲載されていた。それには、「３１日、明けの明星の金星に三日月が、今度は木星から先に近づきます。この時も、十分に近いので、双眼鏡での観察をお勧めします。そして、翌２月１日には、月は金星の左下まで移動します」とある。木星と金星が接近することは毎年起きるが、それに三日月が加わって一直線に並んだのは７５年の人生で初めてである。

「三日月が木・金星と鉢合わせ」　敬鬼

日向ぼこ

冬には珍しい日射しを浴びて暖まると全身が弛緩し、湯だまりならぬ陽だまりを楽しむ。自分ばかりかと思ったら縁の下から出てきた飼い犬も顎を出してうつらうつらしていた。一緒に陽だまりの楽しさを過ごしたくなる。

「人を見る目細く日向ぼこりかな」

「目に酔ひて死にたる如し日向ぼこ」

虚子の２句。日向で温もり、人にもやさしく、自分もうつつを抜けてボーとしている。

「日向ぼっこ日向がいやになりにけり」

久保田万太郎の句。あまりに気持ちよく陽だまりを抜けだせないと詠む。

「子どもらが陽だまり探し日向ぼこ」

「老い二人世間話や日向ぼこ」

「日向ぼこ邯鄲の夢まどろもう」　　敬鬼

「猫を抱きついうとうとと日向ぼこ」　　加代女

おでん

寒い日の夕餉にはおでんは身体を温め、腹を満たし、家族の団欒を満たすので代えがたい。具も大根、たまご、ちくわ、こんにゃく、はんぺん、さつま揚げ、それに糸こんにゃくも欠かせない。おでん鍋を囲み、酒をすすめるとひとりでに話題が出て皆が賑やかになるのでまことに良い。

「おでんやの湯気吹き飛ばす空ッ風」
「おでんやを立ち出でしより低唱す」

虚子の2句。おでん屋での飲み食いで冬の冷気を吹き飛ばし、低く歌を口ずさむと詠む。

「湯気白く大根味しむおでんかな」
「コンビニのおでんほかほか夜食かな」　敬鬼
「手をさすり身体ぬくめるおでん鍋」
「おでん鍋湯気の向こうの笑顔かな」　加代女

日脚伸ぶ

3月に入ると日脚も長くなったと感じる。日の入りは6時手前になるというから散歩していても明るくなったと感じるのは実感だ。1月初旬は5時前に日没をむかえ暗くなるので、その差1時間は大きい。

「日脚伸ぶ」は晩冬の季語であるが、春を感じさせる句が多い。

「日脚伸ぶ今年為すこと多きかな」

虚子の俳句。冬ごもりが終わり心に抱いていたことに取りかかりたいものだと決意を詠んでいる。

「点滴一架日脚の長くなりしかな」

石田波郷の句。肺病で療養が長かった俳人。入院して点滴をうけていると、窓腰の陽が長く日の暮れが遅くなったと強く感じる。

「日脚伸び揺するブランコ影長く」

「日脚伸び守る野手の影も伸ぶ」

「影楕円ころがるボール日脚伸ぶ」　敬鬼

「日脚伸び子どもの帰宅遅くなり」　加代女

著者

林部　敬吉

静岡大学情報学部名誉教授

林部　加代子

元名古屋市小学校教員